

THE FASTER COMMONS TO KYO

T

—



T



THEATER COMMONS TOKYO

Sankar Venkateswaran
Koki Tanaka
Meiro Koizumi
Maxime Kurvers
Ogutu Muraya
Takashi Shima
Yuko Nakamura
Yuta Hagiwara
Hong-Kai Wang
Rabih Mroué
Akira Takayama/Port B

開催概要

都市にあらたな「コモンズ(共有地)」を生み出すプロジェクト、シアターコモンズ。演劇公演、レクチャーパフォーマンス、ワークショップ、対話型イベントなどを港区内で開催!

シアターコモンズは、演劇の「共有知」を活用し、社会の「共有地」を生み出すプロジェクトです。日常生活や都市空間の中で「演劇をつかう」、すなわち演劇的な発想を活用することで、「来たるべき劇場／演劇」の形を提示することを目指しています。演劇的想像力によって、異質なもののや複数の時間が交わり、日常を異化するような対話や発見をもたらす経験をアーティストとともに仕掛けていきます。

具体的には、演劇公演のみならず、レクチャー形式のパフォーマンス、創作プロセスを参加者と共有するワークショップ、異なる声が交錯する対話型イベントなどを集中的に実施します。

シアターコモンズは、港区内に拠点をもつ国際文化機関、台湾文化センター、東京ドイツ文化センター、アンスティチュ・フランセ日本、オランダ王国大使館とNPO法人芸術公社が実行委員会を形成し、「港区文化プログラム連携事業」として港区内を中心に展開します。

シアターコモンズ '19

会期

2019年1月19日[土]、20日[日]
& 2月22日[金] - 3月13日[水]

会場

東京都港区エリア各所

主催

シアターコモンズ実行委員会
台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター
ゲーテ・インスティトゥート 東京ドイツ文化センター
在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ日本
オランダ王国大使館
特定非営利活動法人 芸術公社

共催

港区 平成30年度港区文化プログラム連携事業
慶應義塾大学アート・センター

パートナー

SHIBAURA HOUSE

助成

アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)

ABOUT

A new collective space, a new “commons,” in the city: welcome to Theater Commons Tokyo. Expect theater, lecture performances, workshops and dialogues, held across Minato ward!

Theater Commons Tokyo is a project to create a collective space for society that harnesses the collective wisdom of theater. By using theater – that is, by applying theatrical ideas – in the context of everyday life and the urban space, it aims to propose a model for theater(s) to come. Theater Commons Tokyo and its artists use the imagination of theater to create experiences in which diverging elements and time periods intersect, and the ordinary is defamiliarized through dialogue and discovery. This means that, as well as theatrical productions, it also hosts lecture-style performances, workshops in which participants share in the creative process, dialogues featuring a range of different voices, and more.

Theater Commons Tokyo is held in venues across Minato ward as part of FY2018 Minato Cooperation Project for Cultural Program. The executive committee is composed of Arts Commons Tokyo and the following international cultural institutions based in the ward: Taiwan Cultural Center (Taipei Economic and Cultural Representative Office in Japan), Goethe-Institut Tokyo, Institut français du Japon, and Embassy of the Kingdom of the Netherlands.

Theater Commons Tokyo '19

Date

January 19th, 20th and February 22nd – 13th March, 2019

Venue

Various places in Minato ward, Tokyo

Organized by

Theater Commons Tokyo Executive Committee
Taiwan Cultural Center, Taipei Economic and Cultural Representative Office in Japan
Goethe-Institut Tokyo
Embassy of France in Japan / Institut français du Japon
Embassy of the Kingdom of the Netherlands
Arts Commons Tokyo

Co-organized by

FY2018 Minato Cooperation Project for Cultural Program
Keio University Art Center

In partnership with

SHIBAURA HOUSE

Supported by

Arts Council Tokyo, Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture



都市をサバイブするための、ツールとしての演劇

東京で今、何が可能か。これは東京で暮らす人間ならば誰もが、頭の片隅で、あるいは体のどこかで考えてしまう問いではないだろうか。オリンピックに向けた開発が急ピッチで進み、都市の風景が激変していく。5年前なら、人々が自由に滞在できた公園やパブリックスペースが、ある日突然更地になり、ホテルや複合ビルの建設が進む。都市空間が不動産価値によってゾーニングされ、管理され尽くしていく。

もちろん単なるノスタルジーを主張したいわけではない。都市の繁栄を享受する生活者である私たちは、都市の経済活動と、その帰結としての変容を安直には否定できない。だが、この都市の構造や管理システムによって許容される行動や振る舞いは、いよいよ限定的なものになっているのではないか。都市は、その構造によって私たち、都市のプレイヤーの「振る舞い」を振り付ける。その振り付けのパターンが、どんどん画一化され、それゆえ不気味さを増す。この都市の驚異的な「速さ」と「正確さ」、物理的な「明るさ」と「清潔さ」は、そこに適合できる人間を推奨し、量産する。だが、都市が私たちに強制してくる圧倒的な「正しさ」は、もともと都市の中で見えづらいもの、見えなくされているものを、より不可視のものにしてしまっているのではなかろうか。

今、東京は世界から眼差されている。オリンピックへの視線が注がれているということだけではない。東京は今、かつてない数の観光客から眼差され、外国人労働者や留学生から眼差されている。この肥大化し続ける都市が、多様化する身体、言語、振る舞い、記憶などをどのように内包し、共存させていくことができるか。そして、それら多様なものが「ともにある」ことの負荷と可能性を、どのように受け止め、パブリックなモデルへと開いていくことができるか。

演劇は、そのモデルを思考し、実験するためのツールである。3回目となる今回のシアターコモンズは、いったんそう言

い切ってみるところからスタートしていいだろう。演劇の共有知（コモンズ）を活用し、都市に共有地（コモンズ）を生み出す。これは「シアターコモンズ」というプロジェクトの定義であり理念である。では、演劇の共有知とはなんだろう。演劇は、人間が何かを演じ、それを見るという振る舞いであり、それが成立する集会の形態である。そこには、複数の人が集まり、ある共同体を形成し、言語や身体を介して感情や情報を交換するための、様々な技術が蓄積されている。私たちは今こそ蓄積された演劇の共有知（コモンズ）を参照し、あらたな応用方法を考案することで、今、この都市で有効なツールとして活用することが可能なはずだ。

例えば、東京の街を「他者」の視点で旅してみる。外国人、移民、あるいは、そこで生活しながらも「他者」であることを強いられてきた人とともに、東京を旅する。実在の登場人物たちの旅によって生まれたロードムービーから東京を追体験し、ともに議論する（田中功起「可傷的な歴史（ロードムービー）」）。修学旅行生の振りをして、福島から眼差された東京を集団でツアーする（高山明/Port B「新・東京修学旅行プロジェクト：福島編」）。かつて台湾人作曲家によって紡がれた音楽を集団で受容し、別の形に置き換える（ワン・ホンカイ「This is no country music」）。東京の日常で不可視にされている声や記憶を、私たちはいかに身体的に経験し、「ともにある」ことの負荷と可能性に向き合うことができるだろうか。

そもそも古代ギリシャにおいては、オリンピック競技も演劇も、その共同体が「ともにある」ための宗教行事であり、国家主催の祝祭イベントであった。市民たちは、身体の卓越性や悲劇・喜劇の劇作技術を競い合うことで「ともにある」ことを強化していた。だがそこに、女性、子供、外国人、奴隷が含まれていなかったのはよく知られた話だ。その排除によって担保された民主制を、私たちは古代のこととして片付けることができるだろうか。女性や子供、外国人、隷属的な環境で働

く労働者、そしてあらゆる差別にさらされている人たちと、私たちは本当に「ともにある」のか。近代が強化した差別制度とその構造を乗り越えるための演劇は可能なのか（シャンカル・ヴァンカテーシュワラン「犯罪部族法」）。今回のシアターでは、古代ギリシャを規範とする西洋の劇場／演劇の起源と構造を参照しつつ（マキシム・キュルヴェルス「悲劇の誕生」）、それを非西洋の視座から脱臼する必要もあるだろう。

そもそも古代ギリシャをモデルにしてリメイクされた近代オリンピックは、国民国家の枠組を強化する、人類史上最大の祝祭イベントである。それが19世紀末から20世紀にかけて、帝国主義・植民地主義の時代に発明・発展されたことも偶然ではない。選手が国家を代表するルールの中では、個々のアスリートの卓越性が、国家や民族の優位性に結び付けられてしまう政治性を拒否することは難しい。それでもなお、個人として「走り続ける」こと（オグトウ・ムラヤ「Because I Always Feel Like Running」）。マスメディアに支配され、テロやプロパガンダにも利用されたオリンピックの周辺に、ありえたかもしれないミクロなナラティブを挟むこと（ラビア・ムルエ「歓喜の歌」）。血と汗とフラッシュにまみれた20世紀のオリンピック史を、アーティストの視点から振り返ること自体が、今の東京では有効な身振りになり得るはずだ。

今回初の試みとなるリーディング・パフォーマンスでは、今の東京で有効な言葉とは何かという問いを巡って、3人の演出家（島崇、中村佑子、萩原雄太）と議論を重ねた結果、3つの戯曲を東京にぶつけることになった。その言葉を声に出して身体的に経験するのは、観客＝参加者自身である。スーザン・ソントグ、パブロ・ピカソ、太田省吾。異なる時代を生きた媒介者たちの言葉を、今の東京に召喚したとき、私たちの身体にはどんな変容が訪れるだろうか。その時、都市はどのように二重化され、どのように他所と他者を介在するのだろうか。

プロフィール

相馬千秋（そうま・ちあき）| NPO法人芸術公社 代表理事／アートプロデューサー。急な坂スタジオ初代ディレクター（2006-10）、フェスティバル／トーキョー初代プログラム・ディレクター（F/T09春 - F/T13）、文化庁文化審議会文化政策部会委員（2012-15）。2015年フランス共和国芸術文化勲章シュヴァリエ受章。2016年より立教大学現代心理学部映像身体学科特任准教授。2017年よりシアターコモンズ実行委員長兼ディレクター。次回あいちトリエンナーレ2019では舞台芸術のキュレーションも手がけている。

もちろん、シアターコモンズ自体も、都市が規定するルールやシステムから逃れることができない。2020年に向けて敷かれた太い矢印と無関係ではない。しかしだからこそ、私たちはこの一方向に流れることをどこか強要されるシステムの裏をかき、内側から攪拌するための方法を、インディペンデントな立ち位置から探っていかなければならないだろう。個人を振り付ける大きな力を前に、個人が個人として都市のプレイヤーであり続けるために、私たちはどんな演劇を発明できるだろうか。一方向に進む時間とは別の時間の流れを生み出し、未来と過去をつなぐこと（小泉明郎「私たちは未来の死者を弔う」）。複雑な世界を複雑なまま見るために、誰もが着脱できる小さな身振りをそれぞれの身体や思考にまとうこと。それを可能とする装置としての演劇／劇場の進化系を模索すること。シアターコモンズは、演劇の可能性を拡張しながらこの社会でサバイブしていくための、ささやかにして効果的な方法を、みなさんとともに実験していく場である。ぜひ、その場にご参加いただけたら幸いである。

相馬千秋（シアターコモンズ ディレクター）

DIRECTOR'S NOTE

Theater as a Tool for Surviving the City

What are the possibilities in present-day Tokyo? This is perhaps a question that everyone who lives in Tokyo keeps in the back of their mind, in some corner of their body. With developments for the Olympics advancing at a fever pitch, the landscape of the city will be undergoing dramatic changes. The parks and public spaces everyone could freely visit five years ago have suddenly, one day, turned into empty lots; the construction of hotels and building complexes are in full swing. The space of the city has been given over entirely to zoning and other forms of regulation based on the value of its real estate.

I do not, of course, intend to advocate for mere nostalgia. We residents reap the benefits of the city's prosperity and cannot easily disavow its economic activities, nor the changes that come as their consequences. The activities and conduct permitted by the city's structure and regulatory systems appear, however, more and more restricted. The city choreographs our conduct—the conduct of its players—in accordance with these structures; the patterns this choreography falls into are rapidly homogenized, producing a mounting uncanniness. This city rewards and engineers en masse humans who are able to live up to its astonishing speed and exactitude, its physical brilliance and cleanliness. It would seem, however, that the overwhelming modes of propriety to which the city compels us to conform may serve to render even more invisible that which has always lain in its peripheries, kept out of sight.

Now the eyes of the world are on Tokyo—and their gaze is not fixed only on the Olympics. Tokyo is currently being observed by an unprecedented number of tourists, by foreign laborers and students. How might this ever-expanding city make space for including and coexisting with a diversifying series of bodies, languages, behaviors, and memories? How, furthermore, might we approach the challenges and possibilities of being in solidarity with this diversity, opening the way for a public model for this pursuit?

We might begin this third edition of Theater Commons

Tokyo by provisionally stating that theater is a tool for conceptualizing and testing these models. We will make use of the theater's cultural commons to produce an urban commons within the city: this is the definition and the ethos of the "Theater Commons" project. What, then, do these cultural commons consist of? "Theater" refers to the activity wherein humans watch each other performing certain roles, as well as the form of the assembly that brings this activity into existence. A number of people come together, form a community, and amass a variety of techniques in order to exchange emotions and information through language, the body, and so forth. Today, by referencing the accumulated cultural commons of the theater and conceiving new practical applications for these communities, activities, and techniques, I believe it is possible to put them to use in this city as potent tools.

Travel, for example, through Tokyo's neighborhoods from the perspective of its excluded others—travel through Tokyo together with foreigners, refugees, and the many more who live in this city but have been forced into an "othered" position. Experience Tokyo vicariously through a road movie born from a trip taken by actual people, and engage in discussion together (Koki Tanaka's *Vulnerable Histories (A Road Movie)*). Take a group tour of Tokyo as seen from Fukushima, pretending to be a student on a school excursion (Akira Takayama/Port B's *New Tokyo School Excursion Project: Fukushima Version*). Join another group to embrace the music originally created by a Taiwanese composer and transpose it into a different shape (Hong-Kai Wang's *This is no country music*). How might we physically experience the voices and memories rendered invisible in day-to-day Tokyo, facing up to the challenges and possibilities of being in solidarity with them?

In Ancient Greece, both theater and the Olympic Games originally figured as national festivals and religious rites intended to promote community solidarity, which was cemented through citizens' engagement in competitions based on bodily excellence or the quality of their

comedic/tragic theatrical techniques. Women, children, foreigners, and slaves, however, were precluded from participation, a well-known exclusion in which democracy itself is grounded. Are we able to put this form of political organization aside, as a thing of the past? Are we truly in solidarity with women, children, foreigners, those who labor in subordinate positions, and those who are discriminated against in any number of ways? Is there a form of theater capable of overcoming the discriminatory institutions that have been reinforced by modern times, as well as the structures to which they belong (Sankar Venkateswaran's *Criminal Tribes Act*)? It may be necessary, perhaps, to displace the norms of Ancient Greece within Western theater and theaters by viewing them from non-Western perspectives, even while referencing their origin and structure (Maxime Kurvers's *The Birth of Tragedy*).

Modeled on the Olympic Games of Ancient Greece, the greatest festival in human history is the modern Olympics, which serves to reinforce the framework of the nation state. It is not a coincidence that the period of its invention and development spanned the end of the 19th century through the 20th, the era of colonialism and imperialism. It is difficult, within the confines of a rule stipulating that players act as representatives of some nation, to refuse the politics that would tie the excellence of these individual athletes to the superiority of nations or ethnic groups—as individuals, nevertheless, these athletes are "always running" (Ogutu Muraya's *Because I Always Feel Like Running*). We must introduce potential micro-narratives into the periphery of these games, which are dominated by the mass media and have often been exploited for terrorism or propaganda purposes (Rabih Mroué's *Ode to Joy*). The history of the Olympics in the 20th century was drenched in blood, sweat, and floodlights—it is our hope that the very act of recounting this history from the perspective of artists might act as a potent gesture in Tokyo today.

This year we will present *Reading Performances* for the first time, a series revolving around the question of

Profile

Chiaki Soma | Representative Director of NPO Arts Commons Tokyo, Art producer. Chiaki was the first Program Director of Festival/Tokyo, Japan's leading performing arts festival, from 2009-2013, as well as the first Director of Steep Slope Studio in Yokohama from 2006-2010. She served on the Agency for Cultural Affairs' Culture Council Cultural Policy Subcommittee from 2012-2015. In 2015, she received the Chevalier de L'Ordre des Arts et des Lettres. Since 2016, she has been a Specially Appointed Associate Professor, College of Contemporary Psychology, Body Expression and Cinematic Arts, Graduate School of Contemporary Psychology of Rikkyo University, Tokyo; since 2017, she has served as the chairperson of the Theater Commons Tokyo Executive Committee, as well as its director. She is also involved in theatrical curation for the 2019 edition of the Aichi Triennale.

what words might be effective in Tokyo today. Based on discussions with three directors (Takashi Shima, Yuko Nakamura, Yuta Hagiwara), we will launch the scripts for three plays into the city, with the audience-cum-participants themselves reading the words aloud, experiencing them physically. Susan Sontag, Pablo Picasso, Shogo Ota—all of whom lived in eras different from our own. When we summon the words of these three mediums to present-day Tokyo, what changes will our bodies undergo? In what manner will we find Tokyo redoubled in their expressions, and how might they interpose within the city alternative spaces and excluded others?

Theater Commons Tokyo itself, of course, cannot escape the rules and systems laid out by the city. We cannot claim to have no association with the bold signposts paving the road to 2020. This is precisely, I believe, why we must explore, from independent perspectives, ways of subverting and disrupting the unidirectional flow of these imposed systems from the inside. What kind of theater could we invent to place before us the major forces choreographing the actions and conduct of individuals, in order to remain individual players in the city in which we live? A different flow of time must emerge from its unidirectional progression, connecting the past and the future (Meiro Koizumi's *We Mourn the Dead of the Future*). To view complex worlds in all their complexity, we all must clad our bodies and thoughts with small gestures that can easily be rejected and removed. We must cast about for evolved forms of theater and theaters that will act as apparatuses for making this possible. Theater Commons Tokyo is a space for expanding the possibilities of theater, while collectively experimenting with modest, effective methods for surviving this society. We would be delighted for you to join us here.

Chiaki Soma (Theater Commons Tokyo Director)

目次

シアターコモンズ '19

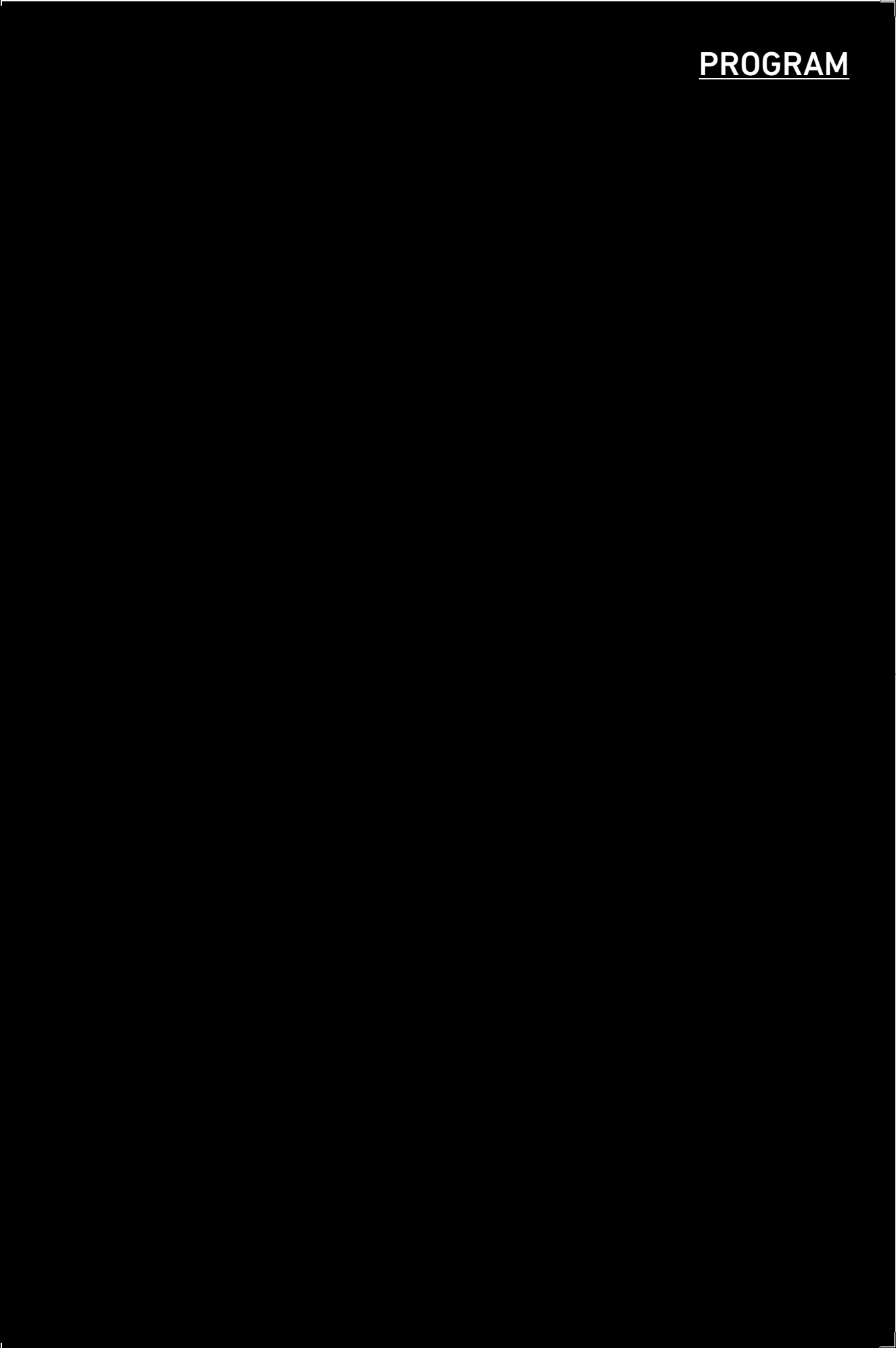
page	
02	開催概要
04	ディレクター・メッセージ
08	目次
09	プログラム
37	会場
38	スケジュール
40	クレジット

CONTENTS

Theater Commons Tokyo '19

page	
02	About
04	Director's note
08	Contents
09	Program
37	Venues
38	Schedule
40	Credits

PROGRAM





©ZTS/Christian Altorfer

シャンカル・ ヴェンカテーシュワラン [インド] Sankar Venkateswaran [India]

犯罪部族法 Criminal Tribes Act

日時

1月19日 [土] 15:00 – 17:30

「犯罪部族法」公演+ポスト・パフォーマンス・ワークショップ

1月20日 [日] 13:00 – 16:00

「犯罪部族法」公演+シアター・コモンズ'19 オープニング・シンポジウム

上演時間

公演 | 約45分

ポスト・パフォーマンス・ワークショップ | 約90分

シンポジウム | 約120分

会場

リーブラホール

〒105-0023 港区芝浦1-16-1 みなとパーク芝浦 1F

参加方法

要予約・コモンズパス提示

関連イベント

シアター・コモンズ'19 オープニング・シンポジウム

演劇公演 | ポスト・パフォーマンス・ワークショップ | シンポジウム

Theater | Post-performance Workshop | Symposium

Dates

January 19th [Sat] / 15:00 – 17:30

Performance of "Criminal Tribes Act" and Post-performance Workshop

January 20th [Sun] / 13:00 – 16:00

Performance of "Criminal Tribes Act" and Theater Commons Tokyo '19 Opening Symposium

Performance times

Performance approx. 45 min.

Post-performance Workshop approx. 90 min.

Opening Symposium approx. 120 min.

Venue

Libra Hall

1F Minato Park Shibaura, 1-16-1 Shibaura, Minato-ku, Tokyo 105-0023

How to Participate

Booking essential.

Show general admission pass on entry.

Related program

Theater Commons Tokyo '19 Opening Symposium

差別はいかに生まれ、いかに乗り越えられるのか？ インドの気鋭演出家が問いかける、「ツールとしての演劇」

Questioning the positions we take in our society, Indian director presents his “theater as a tool”

南インドのケーララ州に劇場を構え、独自の演劇実験を続ける気鋭の演出家シャンカル・ヴェンカテーシュワラン。2016年京都国際舞台芸術祭で上演された『水の駅』（作：太田省吾）をはじめ、その活動は西欧集権的な演劇史をアジアから捉え直し、更新しようとする果敢な挑戦だ。

今回が初となる東京で上演するのは、最新作『犯罪部族法』（2017年チューリヒTheater Spektakel 初演）。1871年–1952年に英国植民地下のインドで実際に施行された「犯罪部族法」は、大道芸人、占い師、行商人などの非定住者やその子孫を「犯罪者」として取り締まるもので、その影響は今日も続いている。観客の前に現れる二人の俳優は、それぞれの母語である英語とカンナダ語で、自らの出自、記憶、リサーチの報告を語り合うが、その対話は古代から続くカースト制や近代化による社会差別の構造を浮き彫りにしていく。立ち会う私たち観客もまた、社会や個人の無意識に潜む差別の構造と向き合うことになるはずだ。

上演後には、演出家・俳優と観客が対話を共有するポスト・パフォーマンス・ワークショップ（1月19日）、祝祭と劇場をめぐるオープニング・シンポジウム（1月20日）を、それぞれ同時開催する。

上演言語

英語・カンナダ語（日本語字幕つき）

クレジット

演出 | シャンカル・ヴェンカテーシュワラン

出演 | チャンドラ・ニーナサム、アニルドゥ・ナーヤル

制作・日本語字幕 | 鶴留聡子

通訳 | 田村かのこ (Art Translators Collective)、山田カイル (抗原劇場)

舞台協力 | 株式会社ステージワークURAK 製作 | シアター・ルーツ&ウィングス

協力 | 公益財団法人セゾン文化財団、京都造形芸術大学

〈舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点〉

会場協力 | 港区

公益財団法人セゾン文化財団

プロフィール

シャンカル・ヴェンカテーシュワラン | 1979年インド・ケーララ州カリカット生まれ。カリカット大学演劇学部卒業後、シンガポールの演劇学校に在籍。2013年、ノルウェーのイブセン奨学金受賞。国内外で演出活動の傍ら、劇団や学校等で独自の演劇ワークショップを開催。2015-16年には「ケーララ州国際演劇祭」の芸術監督を務め、2016年の京都国際舞台芸術祭では太田省吾の代表的戯曲『水の駅』を演出し話題を集める。2016-17年、ドイツのミュンヘン・フォルクス劇場のレパートリー作品を演出。現在、ケーララ州の山中に自ら建設した劇場を拠点に演劇活動を展開している。

Profile

Sankar Venkateswaran | Sankar Venkateswaran is a theatre director from India. Born in Calicut, Kerala, Venkateswaran studied directing at the School of Drama and Fine Arts, University of Calicut, after which he trained at the Theatre Training and Research Programme, Singapore. In 2013 he received the Ibsen Scholarship from Teater Ibsen, Norway, which furthered his work with the indigenous people in Attappadi, Kerala. His following works, including *Criminal Tribes Act*, reflect the shift in his working context. In 2015 and 2016, Venkateswaran served as the artistic director for the International Theatre Festival of Kerala. During his term, the program emphasized South-South exchanges to resist the Eurocentric agendas of cultural practice. He gained attention in Japan with his production of Shogo Ota's *The Water Station* at Kyoto International Performing Arts Festival 2016. Currently he lives and works out of the theatre he built in Attappadi.



©Gabriela Neeb

THEATER COMMONS TOKYO



シアターコモンズ'19 オープニング・シンポジウム Theater Commons Tokyo '19 Opening Symposium

未来の祝祭、未来の劇場 Festivals and Theaters to Come

シンポジウム
Symposium

日時

1月20日 [日] 14:00 – 16:00

*「犯罪部族法」の上演後開催

上演時間

約120分

会場

リーブラホール

〒105-0023 港区芝浦1-16-1 みなとパーク芝浦 1F

参加方法

要予約・コモンズパス提示

関連イベント

シャンカル・ヴェンカテシュワラン
「犯罪部族法」

Date

January 20th [Sun] / 14:00 – 16:00

*Held along with the performance of “Criminal Tribes Act”

Performance times

approx. 120 min.

Venue

Libra Hall

1F Minato Park Shibaura, 1-16-1 Shibaura, Minato-ku, Tokyo 105-0023

How to Participate

Booking essential.
Show general admission pass on entry.

Related program

Sankar Venkateswaran
“Criminal Tribes Act”

シアターコモンズ'19の幕開けとして、シアターコモンズを貫く問いを観客と共有し、その思考を深めるために、参加アーティストや論客を招いたシンポジウムを開催する。

国家的巨大祝祭イベントを控えた2019年の東京。政治的アジェンダ、都市プロモーションや土地開発に連動した文化イベントが次々に開催される一方、それまでインディペンデントに紡がれてきた芸術活動を続けることは難しくなっている。古代ギリシャに起源を持ち、西洋近代が生み出した祝祭モデルの「オリンピック」を批評的に捉えることで、自律的な創造行為の循環は生み出せるだろうか？ 本シンポジウムでは、今日の東京で、またアジアで可能な「祝祭」の形について、儀礼や芸能の起源、演劇的な場のあり方を踏まえて議論を展開していく。きっとそこに未来の祝祭、未来の劇場の形が見えてくるはずだ。

*「犯罪部族法」上演とあわせての参加が基本となります。

登壇者

シャンカル・ヴェンカテシュワラン (演出家)
安藤礼二 (文芸批評家)
高山明 (演出家、Port B主宰)

司会

相馬千秋 (シアターコモンズ・ディレクター)

上演言語

日本語 (英語逐次通訳あり)

クレジット

通訳 | 田村かのこ (Art Translators Collective)、
山田カイル (抗原劇場)
会場協力 | 港区

プロフィール

安藤礼二 (あんどう・れいじ) | 1967年東京都生まれ。文芸批評家、多摩美術大学教授。東京大学客員教授。早稲田大学第一文学部卒業。2002年、「神々の闘争——折口信夫論」で群像新人文賞。主な著書に、芸術選奨文部科学大臣新人賞の『神々の闘争 折口信夫論』(2004年、講談社)、大江健三郎賞と伊藤整文学賞の『光の曼陀羅 日本文学論』(2008年、同)、角川財団学芸賞とサントリー学芸賞の『折口信夫』(2014年、同)。最新刊に『大拙』(2018年、同)がある。

シャンカル・ヴェンカテシュワラン (p. 11)、高山明 (たかやま・あきら) (p. 27)、相馬千秋 (そうま・ちあき) (p. 5)

For the opening of Theater Commons Tokyo '19, we will invite participating artists and critics for a symposium that will serve to share with our audience members some of Theater Commons Tokyo's persisting concerns, as well as develop the ways in which we think about them.

Tokyo in 2019 lies on the verge of a massive national event. While culture-related activities associated with political agendas, urban promotion, and land development are occurring one after another, it becomes increasingly difficult to continue initiatives that have, up to now, been run independently. Would it be possible to bring about a circulation of autonomous creative acts through critical interpretations of the Olympics, which has served as a major model for “festivals” and, originating in ancient Greece, came out of the modern Western world? In this symposium, we will discuss the forms of festivals possible in Tokyo and Asia today, taking into consideration the origins of ceremony and entertainment, as well as the state of spaces for the theatrical arts. We hope to accordingly emerge with a clearer image of the shapes that will be taken by festivals and theaters to come.

* Performance attendance is required for symposium admission

Panelists

Sankar Venkateswaran (Theater Director)
Reiji Ando (Art Critic)
Akira Takayama (Port B, Theater Director)

Moderator

Chiaki Soma (Director of Theater Commons Tokyo)

Language

Japanese (with English interpretation)

Credit

Interpreter | Kanoko Tamura (Art Translators Collective),
Kyle Yamada (Allergen Theatre)
Venue support | Minato City

Profile

Reiji Ando | Born in Tokyo in 1967, Reiji Ando is an art and literature critic, as well as a professor at Tama Art University and visiting professor at Tokyo University. He graduated from Waseda University's Literature Faculty 1. In 2002, he was awarded the Art Encouragement Prize for Excellence in Literary Criticism for his book *Kamigami no toso-Orikuchi Shinobu-ron (The Gods' Struggle: An Interpretation of Shinobu Orikuichi)*. Major works include Minister of Education Award for Fine Arts New Face Prize-selected *Kamigami no toso-Orikuchi Shinobu-ron (The Gods' Struggle: An Interpretation of Shinobu Orikuichi)* (Kodansha, 2004); Kenzaburo Oe Prize and Sei Ito Prize-selected *Hikari no mandara nippon bungaku-ron (Mandala of Light: Japanese Literary Theory)* (ibid, 2008); and Kadokawa Foundation Liberal Arts Prize and Suntory Prize for Social Sciences and Humanities-selected *Orikuchi Shinobu (Shinobu Orikuichi)* (ibid, 2014). His most recently published work is *Daisetsu* (ibid, 2018).

Sankar Venkateswaran (p. 11), Akira Takayama (p. 27), Chiaki Soma (p. 7)





Courtesy of the artist, Vitamin Creative Space (Guangzhou), Aoyama Meguro (Tokyo)

映像上映 | アッセンブリー

Screening | Assembly

田中功起 Koki Tanaka

可傷的な歴史 (ロードムービー) Vulnerable Histories (A Road Movie)

日時

2月22日 [金] 19:00

2月23日 [土] 19:00

2月24日 [日] 13:00

*各日ともに、映像上映の前後にゲストを交えた対話の場 (アッセンブリー) を設定し、参加者とともに鑑賞経験を共有します。

ゲスト

2月22日 | 青山真也 (撮影監督)、温又柔 (小説家)、ハン・トンヒョン (社会学者)、福尾匠 (批評家)
2月23日 | 鄭 優希 (出演者)、ハン・トンヒョン (社会学者)、藤口諒太 (音響)、山本唯人 (東京大空襲・戦災資料センター主任研究員)
2月24日 | 明戸隆浩 (社会学者)、中村佑子 (映画監督・エッセイスト)、福尾匠 (批評家)

上演時間

150分

会場

ゲーテ・インスティトゥート 東京ドイツ文化センター
〒107-0052 港区赤坂7-5-56

参加方法

要予約・コモンズパス提示

Dates

February 22nd [Fri] / 19:00

February 23rd [Sat] / 19:00

February 24th [Sun] / 13:00

*A space will be set up for guests to mingle and engage in discussion prior to and following the film for each day.

Guests

Feb. 22nd | Shinya Aoyama (DOP), Yuju Wen (Writer), Ton-hyong Han (Sociologist), Takumi Fukuo (Critic)
Feb. 23rd | Woohi Chung (Protagonist), Ton-hyon Han (Sociologist), Ryota Fujiguchi (Sound), Tadahito Yamamoto (Chief curator at the Center of Tokyo Raids and War Damage in Tokyo)
Feb. 24th | Takahiro Akedo (Sociologist), Yuko Nakamura (Filmmaker and Essayist), Takumi Fukuo (Critic)

Performance times

150 min.

Venue

Goethe-Institut Tokyo
7-5-56 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-0052

How to Participate

Booking essential.
Show general admission pass on entry.

排除や差別を超えて、それでも「共に生きる」ために——。 田中功起による「傷つきやすい」ロードムービー、日本初公開。

Whatever it takes to live together, to overcome exclusion and discrimination – Koki Tanaka presents the Japanese premiere of his “vulnerable” road movie.

異なる人々が「共に生きること」の可能性や限界について、仮構の共同体を組織して撮影する手法で探求するアーティスト、田中功起。私たちは他者と出来事や経験を共有することは可能なのか。田中が向き合い続けてきたこの問いは、世界中で排外主義やポピュリズムが高まる今日、より切実さを増している。

2018年にミグロ現代美術館で発表され今回日本初公開となる本作 (シアターコモンズ・短縮編集バージョン) は、「共に生きる」権利を侵されてきた人たちの側から、この問いにさらに踏み込むものだ。東京に暮らす日コリアン3世とチューリッヒから来た日系スイス人。田中によって引き合わされた実在の「登場人物」たちは、ともに東京や川崎を旅し、在日コリアン排斥の痕跡を辿りながら、それぞれの経験、思考、感情をもとに対話を重ねていく。この淡々と美しく、残酷で傷つきやすいロードムービーの果てに、私たちは、「それでも共に生きる」ための希望を見出すことができるのか。

今回のシアターコモンズでは、映像上映の後にゲストを交えた対話の場 (アッセンブリー) を設定し、集団での鑑賞経験の共有を試みたい。

上演言語

映像上映 | 英語 (日本語字幕つき)

アッセンブリー | 日本語

クレジット

構成・演出 | 田中功起 キャスト | 鄭 優希^{チョンウヒ}、クリスチャン・ホファー
プロジェクトアドバイザー・講師 | ハン・トンヒョン 講師 | 西崎雅夫 (社団法人ほうせんか)
法律アドバイザー | 明戸隆浩
事前勉強会講師 | 山本唯人 (東京大空襲・戦災資料センター)
撮影監督 | 青山真也 録音・整音 | 藤口諒太
映像制作 | 田中沙季 英語字幕 | ディーン島内翻訳事務所
日本語字幕翻訳 | 大館奈津子 (芸術公社)
日本語字幕監修 | 戸田史子 (芸術公社)
法律翻訳 | 東久保麻紀
助成 | アーツカウンシル東京 (公益財団法人 東京都歴史文化財団)
製作 | ミグロ現代美術館
協力 | 青山目黒、ビタミン・クリエイティブ・スペース、ゲーテ・インスティトゥート 東京ドイツ文化センター



プロフィール

田中功起 (たなか・こおき) | 1975年生まれ。出来事の組織化や集団による営み、その記録に興味を持ち、それにつながる制作活動を行っている。2013年、第55回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際美術展の日本館における展示で特別表彰を受賞。近年の展覧会に「共にいることの可能性」(水戸芸術館、2016年)、「Vulnerable Histories (A Road movie)」(ミグロ現代美術館、2018年) など。2017年ミュンスター彫刻プロジェクト参加。

Profile

Koki Tanaka | Koki Tanaka was born in 1975. His creative activities are centered around his interest in documenting phenomena such as the organization of happenings or the inner workings of groups. His art has been on view in numerous countries, including, most recently, at Kunsthaus Graz (2017), the Deutsche Bank KunstHalle, Berlin (2015), the Van Abbemuseum, Eindhoven (2014), the National Museum of Modern Art, Kyoto and Tokyo (2013), the Museum of Art, Seoul (2013), the Hammer Museum, Los Angeles (2012), the Taipei Contemporary Art Center (2012), and the Palais de Tokyo, Paris (2007). Tanaka was Japan's official representative at the 55th Venice Biennale in 2013 and received Deutsche Bank's Artist of the Year Award in 2015. In 2017, he contributed work to Skulptur Projekte Münster and the 57th Venice Biennale.



©Motoyuki Daifu



©Meiro Koizumi

映像インスタレーション

Exhibition

小泉明郎 Meiro Koizumi

私たちは未来の死者を弔う We Mourn the Dead of the Future

日時

2月22日 [金] – 3月10日 [日] (月・火 休)
水・木・金 13:00 – 20:00 (最終入場 : 19:30)
土・日 12:00 – 20:00 (最終入場 : 19:30)
*ただしトーク開催日2/27および最終日3/10は19:00まで
(最終入場は18:30まで)

上映時間

約50分
*期間中は常時ループ上映を行います。

会場

北千住BUoY 2Fギャラリー
〒120-0036 足立区千住仲町49-11

参加方法

予約不要・要コモンズパス提示

関連イベント

小泉明郎+出演者たちによるトーク
日時 | 2月27日 [水] 19:00 – 21:00
会場 | 北千住BUoY 2Fギャラリー
定員 | 40名
参加方法 | 予約不要・先着順 コモンズパス提示

Dates

February 22nd [Fri] – March 10th [Sun]
(closed on Mondays and Tuesdays)
Wed – Fri / 13:00 – 20:00 (Last admission: 19:30)
Sat, Sun / 12:00 – 20:00 (Last admission: 19:30)

*On 2/27, the day of the talk event, and 3/10, the final day of the program,
the video will run until 19:00, with last admission at 18:30.

Screening time

approx. 50 min.
*The video will be played on a loop throughout the exhibition period

Venue

Kitasenju BUoY 2F Gallery
49-11 Senju-Nakacho, Adachi-ku, Tokyo 120-0036

How to Participate

Show general admission pass on entry.

Related program

Discussion with Meiro Koizumi and performers
Date | February 27th [Wed] 19:00 – 21:00
Venue | Kitasenju BUoY 2F Gallery
Number of places | 40
Show general admission pass on entry (first come, first served)

映像と演劇の交わる地点で新境地を切り拓く小泉明郎。 時間の裂け目で永劫回帰する、未来の英雄／死者たち が甦る儀式／パフォーマンス映像。

Meiro Koizumi continues to open up new frontiers at the point where video and theater meet.
Come see his ritual/performance video that revives future heroes/the dead, eternally recurring at
a rip in time.

国家と個人、精神と身体の関係を探求し、演劇的な手法を経て
映像にあぶり出すアーティスト、小泉明郎。近作「夢の儀礼—帝
国は今日も歌う—」をはじめ、社会に潜む暴力やその構造を、無
意識的かつ身体的な反応として映像化する演出力は、美術界の
みならず演劇界からも大きな注目を集めている。

昨年、シアターコモンズで開発したワークショップでは、小泉
が長年取り組んできたヒロイズムや自己犠牲のテーマをめぐり、
20名の若者たちとともにパフォーマンスを創作。極寒の雨の中、
かつての米軍基地跡地にて「未来の英雄／死者たち」を弔うた
めの儀式／上演を行った。「あなたは何かを守るために命を投
げ出せますか?」この究極的な問いに向き合うことを強いられた
若者たちと、それを取り囲む傍観者たちが映り込む演劇的映像
は、神聖さと痛みをたたえながら、観る者にも同じ問いを突きつ
けてくるはずだ。

上演言語

日本語

クレジット

構成・演出 | 小泉明郎
出演 | 植村真、柏木健太郎、久保勝大、
小橋清花、志賀耕太、敷地理、篠原奏、柴田悠、
武田大輝、鄭優希、寺澤亜彩加、萩原朋花、
花島大樹、原知慶、日比野桃子、松枝昌宏、
馬淵一樹、三好帆南、村田天翔、渡辺ひとみ
演出助手 | 小山涉
撮影ディレクター | 森内康博 (らくだスタジオ)
撮影 | 青山真也
録音 | 西垣太郎
撮影協力 | 中村碧、宮澤響
録音アシスタント | 近藤崇生
制作・主催 | シアターコモンズ実行委員会、無人島プロダクション

プロフィール

小泉明郎 (こいずみ・めいろう) | 1976年群馬県生まれ。
国際基督教大学卒業後に渡英し、ロンドンのチェル
シー・カレッジで映像表現を学ぶ。近年はニューヨー
ク近代美術館のProjectsやテート・モダンのBMW
テート・ライブをはじめ、国内外の数多くの展覧会に
参加。2015年には初期作品から新作までを揃えた
初の大規模個展「捕われた声は静寂の夢を見る」を
アーツ前橋で開催。2017年、vacantで開催された個
展「帝国は今日も歌う」は社会と個人の心理に深く切
り込む大胆な映像で大きな反響をよんだ。

Profile

Meiro Koizumi | Koizumi studied at the International Christian University,
Tokyo (1996-1999), Chelsea College of Art and Design, London (1999-
2002), and Rijksakademie van beeldend kunsten, Amsterdam (2005-
2006). His previous solo exhibitions include "Trapped Voice Would Dream
of Silence" at Arts Maebashi (2015), "Project Series 99: Meiro Koizumi" at
Museum of Modern Art, New York (2013), "Stories of a Beautiful Country"
Centro de Arte Caja de Burgos (CAB), Spain (2012), "Defect in Vision"
at Annet Gelink Gallery, Amsterdam (2012), MAM Project 009 at Mori
Museum, Tokyo (2009). He participated in numerous group shows such
as, "Future Generation Art Prize" at Pinchuk Art Center, Kiev (2012),
"Invisible Memories" at Hara Museum, Tokyo (2011), Liverpool Biennial
(2010), Media City Seoul (2010), and Aichi Triennale, Japan (2010).

Meiro Koizumi is an artist who explores the relationships
between the state and the individual, the spirit and the
body, and explicates them in video works using theatrical
techniques. His direction style treats filming as an
involuntary, physical reaction that expresses the violence
latent in society and its structures, and – with his recent
work *Rite for a Dream (Today My Empire Sings)*, among others
– has been making waves in the worlds of theater and art.

In his collaborative workshop with Theater Commons
Tokyo last year, Koizumi and 20 youths created a
performance concerning themes with which he has long
grappled: heroism and self-sacrifice. At the site of a former
US army base, in the freezing rain, they conducted a ritual/
performance to mourn for "the heroes/dead of the future."
Can people throw their lives away for the nation state, or
for other ideals? Portraying the youths forced to face this
proposition and the surrounding onlookers, emanating
sanctity and pain, this theatrical video will confront its
viewers with the same ultimate question.

Language

Japanese

Credit

Concept, Direction | Meiro Koizumi
Performers | Makoto Uemura, Kentaro Kashiwagi, Masahiro Kubo,
Kiyoka Kobashi, Kota Shiga, Osamu Shikichi, Kana Shinohara, Yu Shibata,
Masaki Takeda, Woohi Chung, Asaka Terazawa, Tomoka Hagiwara,
Hiroki Hanashima, Tomoyoshi Hara, Momoko Hibino, Masahiro Matsueda,
Kazuki Mabuchi, Honami Miyoshi, Takato Murata, Hitomi Watanabe
Assistant Director | Wataru Koyama
Director of Photography | Yasuhiro Moriuchi (RAKUDA STUDIO)
Camera | Shinya Aoyama
Sound | Taro Nishigaki
Camera Assistant | Aoi Nakamura, Hibiki Miyazawa
Sound Assistant | Takao Kondo
Produced and Organized by Theater Commons Tokyo Executive Committee,
Mujin-to Production



©Meiro Koizumi



©Willy Vainqueur

マキシム・キュルヴェルス [フランス] Maxime Kurvers [France]

悲劇の誕生 The Birth of Tragedy

日時

2月23日 [土] 16:30
2月24日 [日] 16:30 *終演後、アフタートーク有

上演時間

90分

会場

リープラホール
〒105-0023 港区芝浦1-16-1 みなとパーク芝浦 1F

参加方法

要予約・コモンズパス提示

Dates

February 23rd [Sat] / 16:30
February 24th [Sun] / 16:30 *Talk (after the performance)

Performance times

90 min.

Venue

Libra Hall
1F Minato Park Shibaura, 1-16-1 Shibaura, Minato-ku, Tokyo 105-0023

How to Participate

Booking essential.
Show general admission pass on entry.

演劇公演

Theater

悲劇はいかに誕生し、いかに共有されるのか？ 理性、感情、身体を揺さぶる、ギリシャ悲劇のあらたな受容体験。

How was tragedy born, and how can it be shared? Maxime Kurvers presents a new experience of Greek tragedy that will simulate your mind, body, and emotions.

古代ギリシャでは、スポーツ競技としてのオリンピック（オリンピア祭典）が行われていたのと同様に、戯曲コンペとしての演劇祭（大ディオニシア祭）が国家主催の宗教行事として行われていた。フランスを拠点に活躍する若き演出家マキシム・キュルヴェルスは、フェスティバル・ドートンヌ・パリでの新作発表に際し、この西洋演劇の本丸とも言えるギリシャ悲劇の本質と構造について、あらたな方法で観客との共有を提案する。

舞台上でたった一人の俳優が、「悲劇の誕生」について、まるで演劇史の教科書さながら語り始める。時代を遡ること2500年、アテネのデュオニッソス劇場は、1万人を超える観客＝市民が集い、神話や歴史をもとに創作された悲劇を通じて、都市国家という共同体のあり方を議論する場であった。レクチャーは次第に、アイスキュロス作『ペルシア人』をめぐる一種の上演／再現へと移行する。ギリシャに敗北するペルシア軍の惨状を現代の観客に向けて語ることはなにを意味するのか。このシンプルにしてラディカルな上演は、私たちに演劇が演劇として成立する最小限のメカニズムや条件、演劇の役割をめぐる、理性、感情、身体の方角から共感と思考を促すはずだ。

Analogous to the sporting event the Olympic Games, the Great Dionysia Festival was a competitive theater festival held as a national religious ceremony in ancient Greece. With this new work, which recently had its premiere at The Paris Autumn Festival, young French theater director Maxime Kurvers proposes new approaches to sharing the essence and structure of the Greek tragedy, a genre that could be characterized as the stronghold of Western theater.

The single actor on stage begins to recount possible "births of tragedy" in the manner of telling a subjectified history. 2500 years ago, the Theatre of Dionysus in Athens was a place where over 10,000 citizens gathered to discuss the ethos and ideals of the city-state, through plays based on history and mythology. A reenacted memory of tragic literature and a history of western scenic art emerge from the actor's portrayal of these events, conjured from the first known tragic work, *The Persians* by Aeschylus. In 2018, what is the significance of telling an audience the story of the Persian army's devastation in their defeat by the Greeks? This deceptively simple, radical performance will stimulate audiences' minds, bodies, and emotions, prompting empathetic and intellectual reflections on the basic mechanisms and conditions that birthed theater as theater, and on the role of theater itself.

上演言語

フランス語（日本語同時通訳つき）

Language

French (with Japanese interpretation)

クレジット

構成・演出 | マキシム・キュルヴェルス
出演 | ジュリアン・ジェフロワ
作・ドラマトゥルギー | ジュリアン・ジェフロワ、マキシム・キュルヴェルス、カロリーヌ・ムノン＝ベルトゥ
衣装 | アンヌ＝カトリーヌ・クンズ
テクニカル・ディレクター | マノン・ロリオル
通訳 | 平野暁人
舞台協力 | 株式会社ステージワークURAK
制作 | ラ・コミュニケーション国立オーベルヴィリエ演劇センター
共同制作 | フェスティバル・ドートンヌ・パリ
会場協力 | 港区
助成 | アンスティチュ・フランセ日本

Credit

Concept, Direction | Maxime Kurvers
Performer | Julien Geffroy
Script, Dramaturg | Julien Geffroy, Maxime Kurvers, Caroline Menon-Bertheux
Costume | Anne-Catherine Kunz
Interpreter | Akihito Hirano
Stage support | URAK
Technical Director | Manon Lauriol
Produced by Théâtre de la Commune (Aubervilliers)
In collaboration with Festival d'Automne à Paris
Venue support | Minato City
Supported by Institut français du Japon

プロフィール

マキシム・キュルヴェルス | 1987年フランス生まれ。ストラスブール国立演劇学校卒業後、複数の演劇作品の舞台美術や、ジェローム・ベルの複数の作品で演出助手を務める。2016年よりラ・コミュニケーション国立オーベルヴィリエ演劇センターのアソシエイト・アーティスト。2016年に演出作品『音楽辞典』、2018年に最新作『悲劇の誕生』をフェスティバル・ドートンヌで上演し、好評を博す。

Profile

Maxime Kurvers | Maxime Kurvers was born in France in 1987. He pursued theoretical studies in the performing arts before joining the stage design class at the School of the National Theater in Strasbourg. He created his first performance, *short pieces 1-9* (2015), as a theater program that examined the minimal conditions of its own realization. *Dictionary of music* (2016) continued this questioning of the theater and its resources via the presence and the history of other mediums. Since 2016 he has been an associate artist at La Commune centre dramatique national Aubervilliers. His *Dictionary of music* and this last piece, *The birth of tragedy*, were performed at The Paris Autumn Festival in 2016 and 2018 respectively.





©Ernst Van Deursen

演劇公演

Theater

オグトゥ・ムラヤ [ケニア／オランダ]

Ogutu Muraya [Kenya/the Netherlands]

Because I Always Feel Like Running

日時

2月24日 [日] 14:00 / 19:00

2月25日 [月] 19:00 *終演後、アフタートーク有

上演時間

60分

会場

SHIBAURA HOUSE

〒108-0023 港区芝浦3-15-4

参加方法

要予約・コモンズパス提示

Dates

February 24th [Sun] / 14:00 / 19:00

February 25th [Mon] / 19:00 *Talk (after the performance)

Performance times

60 min.

Venue

SHIBAURA HOUSE

3-15-4 Shibaura, Minato-ku, Tokyo 108-0023

How to Participate

Booking essential.

Show general admission pass on entry.

020

PROGRAM

「僕はいつだって走りたい／逃げたいから——」 アフリカの英雄たちの身体と声を受肉する、スポークン・ワード演劇。

“Because I always feel like running (away) – ” Ogutu Muraya’s spoken word performance incarnates the bodies and voices of the great athletes from East Africa.

ケニア出身で、オランダを拠点に活躍する演出家・俳優オグトゥ・ムラヤ。その視線は、大きな物語の下に埋もれた個人に光をあて、その声は、類まれなスポークン・ワード（語り芸）のパフォーマンスで観客を魅了する。

1964年東京オリンピック、マラソン競技金メダリストとして歴史に刻まれたエチオピアのアベベ・ビキラ。続く1968年メキシコ・オリンピックであらたな伝説を紡いだケニアのキプチョゲ・ケイノや、タンザニアのジョン・スティーブン・アクワリ。彼らのようなアフリカ出身の超人的アスリートの存在は、60年代のアフリカ諸国の独立運動を後押しし、その勝利が、国家建設のプロセスや国家アイデンティティ形成と深く連動していた。ランナーたちの身体は、まさに脱植民地時代の政治が交錯する権力闘争の場でもあったのだ。

ムラヤはオリンピックと政治の関係性を批評的にとらえ、アスリートをめぐる歴史と個人のナラティブをリズミカルな英語で紡ぎ出す。その語りの彼方には、アフリカを背負って常に走り続けてきた英雄たちの強靱な身体の上に刻まれた、生々しい世界構造が浮かび上がるはずだ。

上演言語

英語（日本語字幕つき）

クレジット

構成・演出・出演 | オグトゥ・ムラヤ 共同制作 | レイラ・アンダーソン

協力 | ノア・フォルカー、アビシェク・ターバル、アキラ・ミラン、シタワ・ナムワリ

製作協力 | Veem House for Performance & Amsterdam's Fonds voor de Kunst,

Bâtard Festival & Kunstenwerkplaats Pianofabrie

字幕翻訳 | 齋藤啓

字幕監修 | 戸田史子（芸術公社）

助成 | オランダ王国大使館

Ogutu Muraya is a director and actor born in Kenya and based in the Netherlands. His gaze illuminates the individuals submerged beneath grand narratives; his voice captivates the audience with his unique spoken word performances.

Ethiopia's Abebe Bikila went down in history as the marathon gold medalist of the 1964 Tokyo Olympics; new legends were born with the performances of Kenya's Kipchoge Keino and Tanzania's John Steven Akhwari at the 1968 Mexico Olympics that followed. With the presence of such superhuman athletes lending support to the independence movements of African countries in the '60s, these victories were deeply intertwined with the processes of nation construction and the formation of national identities. The very bodies of these runners figured as sites for a power struggle that brought together the political concerns of the colonial era.

Offering a critical interpretation of the relation between politics and the Olympics, Muraya brings to life in rhythmical English the history surrounding these athletes, as well as their personal narratives. A vivid world structure will emerge from the depths of his words – engraved on the resilient bodies of the great athletes who were always running, carrying Africa on their backs.

Language

English (with Japanese subtitles)

Credit

Concept, Direction, Performer | Ogutu Muraya

In collaboration with Leila Anderson

Special Thanks to Noah Voelker, Abhishek Thapar, Akira Milan, Sitawa Namwalie

Developed with support from Veem House for Performance & Amsterdam's

Fonds voor de Kunst, Bâtard Festival & Kunstenwerkplaats Pianofabrie

Subtitles translation by Kei Saito

Subtitles supervised by Fumiko Toda (Arts Commons Tokyo)

Supported by Embassy of the Kingdom of the Netherlands

プロフィール

オグトゥ・ムラヤ | 1986年ケニア生まれ。スポークン・ワードの語りの手法を組み込んだ作品を特徴とする作家、演出家。大きな声の下で見過ごされ、抑圧されてしまいがちなストーリーを掘り上げることをテーマに作品を制作してきた。アフリカの大学で国際関係を学んだのち、2016年アムステルダム芸術大学で芸術学修士号を取得。ラ・ママ（ニューヨーク）、ヘイ・フェスティバル（ウェールズ）、Spoken Wor:l:ds（ベルリン）、グローブ・トゥ・グローブフェスティバル（ロンドン）等に出演。シュピールアート（ミュンヘン）や東アフリカ圏内にてレジデンスを行う。現在はVeem House for Performanceのパートナーとして、オランダをベースに活動中。

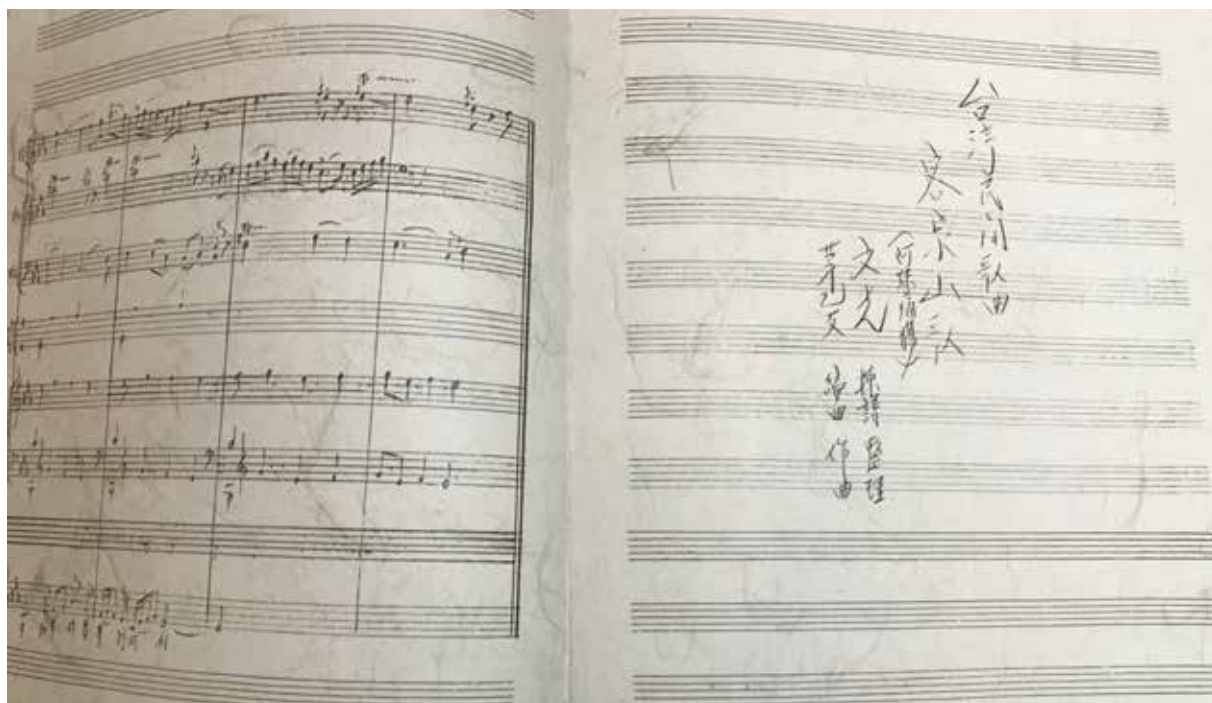
Profile

Ogutu Muraya | Ogutu Muraya was born in Kenya in 1986. He is a writer and theatre-maker whose work is embedded in the practice of orature. He engages the sociopolitical with the belief that art is an important catalyst for advocacy, for questioning our certainties, and for preserving stories often 'miss-told' or suppressed in the mainstream. Ogutu studied International Relations at USIU-Africa and graduated in 2016 with a Master in Arts at Amsterdam University of the Arts – DAS Theatre. His performative works & storytelling have featured in several theatres and festivals including- La Mama (NYC), The Hay Festival (Wales), Spoken Wor:l:ds (Berlin), Globe to Globe Festival (London) etc. Art in Resistance: Spielart (Munich) & within East Africa. He is currently based in the Netherlands as a partner at the Veem House for Performance.



PROGRAM

021



ワン・ホンカイ [台湾] Hong-Kai Wang [Taiwan]

This is no country music

日時

3月2日 [土] 17:00

3月3日 [日] 17:00

*作品制作にあたり、1月26日 [土] – 28日 [月] の3日間の創作ワークショップを開催します。(コモンズパス対象外・要予約)。

上演時間

約60分

会場

台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター

〒105-0001 港区虎ノ門1-1-12 虎ノ門ビル2F

参加方法

要予約・コモンズパス提示

関連イベント

創作ワークショップ | 無料・要予約

日時 | 2019年1月26日 [土]・27日 [日] 13:00 – 18:00、28日 [月] 18:00 – 21:30

会場 | 台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター 他

募集期間 | 2018年12月21日 [金] – 2019年1月7日 [月]

募集人数 | 15名程度

応募資格 | 1月26日 [土] – 28日 [月] の全日程参加できる方

国籍不問

レクチャーパフォーマンス | ワークショップ

Lecture Performance | Workshop

Dates

March 2nd [Sat] / 17:00

March 3rd [Sun] / 17:00

*Artwork will be created during a three-day creative workshop held from January 26th [Sat] to 28th [Mon] (Reservations are required and not included in the general admission pass)

Performance times

approx. 60 min.

Venue

Taiwan Cultural Center, Taipei Economic and Cultural Representative Office in Japan

2F Toranomon Building 1-1-12 Toranomon, Minato-ku, Tokyo 105-0001

How to Participate

Booking essential.

Show general admission pass on entry.

Related program

Creative workshop | Free / Booking essential

– Date: January 26th [Sat], 27th [Sun] 13:00 – 18:00 and 28th [Mon] 18:00 – 21:30

– Venue: Taiwan Cultural Center, Taipei Economic and Cultural Representative Office in Japan and others

– Application period: December 21st, 2018 – January 7th, 2019

– Number of places: 15.

– Application criteria:

- Must be able to participate for three days of the workshop.
- All nationalities are welcome.

20世紀の東アジア史に翻弄された作曲家、江文也。 「国家」という枠組みの狭間で紡がれた「国なき譜 (うた)」を再現する、 異色の「学校／リハーサル」。

Thrown at the mercy of East Asia's 20th century, composer Bunya Koh wove his “no country music” between three political entities. Join us for its revival in a special “school/rehearsal.”

1936年ベルリン・オリンピック芸術競技部門に交響曲「台湾舞曲」を出品し、山田耕作らをおさえ入賞した「日本人」作曲家がいたことをご存知だろうか。江文也 (1910-1983) は、日本統治下の廈門 (アモイ) で育ち、日本で歌手としても音楽家としても名を成し、中国に教授として迎えられ、冷戦や文化大革命によって、二つの故郷に帰ることなく中国で死去した不遇の芸術家である。

時代の荒波のなか、江は孔子の音楽思想を学び、台湾・日本・中国の土着の音楽文化の調査・収集を熱心に行っており、それらを元にして書かれた楽譜は、調査ノートそのものと言っても過言ではない。私たちは今、江が残した膨大な「国なき譜 (うた)」へ、どのようにアプローチすることが可能なのか。

この問いと向き合うのは、台湾を拠点に世界的に活躍するアーティスト、ワン・ホンカイ。今回、彼女は専門家と協働したりサーチを経て、創作ワークショップを企画、その成果をレクチャーパフォーマンスとして披露する。そこで参加者は、「聴く」、「読む」、「歌う」、「空間を立ち上げる」、「鑑賞する」といった行為を集団で経験することによって、江文也とその音楽、彼が生きた東アジアの歴史について、あらたな知覚とともに追体験することになるだろう。

上演言語

中国語 (日本語逐次通訳つき)

クレジット

構成・演出・出演 | ワン・ホンカイ

リサーチ (音楽史) | 鄭曉麗

通訳・翻訳・リサーチ | 詹慕如

会場協力・助成 | 台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター

プロフィール

ワン・ホンカイ (王虹凱) | 台湾・虎尾 (フーウェイ) 生まれ。言語、イデオロギー、アイデンティティ、知識の枠組を絶え間なく緊張関係に置き、既存の歴史や地理の理解を変形させるアプローチで国際的に高い評価を得る。発表メディアはサウンド・インスタレーション、パフォーマンス、ワークショップ、テキストなど多岐にわたる。2017年ウィーン芸術アカデミーで博士号を取得。ヴェネツィア・ビエンナーレ台湾館 (2011)、ドクメンタ14、台北ビエンナーレ等国際展にも多数参加。日本では京都国際現代芸術祭パラソフィア2015、TPAM2019にも招聘されている。

Did you know that there was a “Japanese” composer who submitted the orchestral work *Formosan Dance* to the 1936 Berlin Olympic International Music Competition, winning against the likes of Kosaku Yamada? Bunya Koh was born in Taiwan under Japanese occupation, grew up in Japan-occupied Xiamen in China and made his name as a vocalist as well as composer in Japan. While he was initially given a professorship in China, the Cold War tensions and events such as the Cultural Revolution caused him to die an obscure artist, unable to return to either of his two homelands.

Amidst the hardships of his era, Koh studied ancient Confucian music, passionately researching and collecting ethnomusic across Taiwan, Japan, and China, and writing scores based on his findings – it would not be an exaggeration to suggest that these very compositions were his fieldnotes. In the present day, how can we begin to approach the wild realm of “no country music” he left behind?

Internationally active Taiwan-based artist Hong-Kai Wang will confront this question. Having conducted, in collaboration with specialists, research into Koh's practice, Wang organizes a creative workshop in which she will share, sonically and somatically, the results. By embarking as a group on “listening, reading, singing, spatialization, audiencing,” and more, participants will collectively develop “clairaudience” with and a fresh, imaginative outlook on Bunya Koh and his music – as well as on the historical events that took place in East Asia during his lifetime, which have shaped us all forever.

Language

Chinese (with Japanese interpretation)

Credit

Concept, Direction, Performer | Hong-Kai Wang

Research (Music history) | Xiaoli Zheng

Interpretation, Translation, Research | Muji Tsan

Venue and supported by Taiwan Cultural Center, Taipei Economic and Cultural Representative Office in Japan

Profile

Hong-kai Wang | Born in Huwei, Taiwan, Hong-Kai Wang's approach to unceasing tensions between languages, ideologies, identities, and knowledge regimes questions the presuppositions of given histories and geographies, garnering her high international appraisal. Her artwork spans a variety of media, including sound installation, performance, workshops, texts, and more. She is currently a PhD in Practice candidate from the Academy of Fine Arts Vienna. Wang has participated in many international exhibitions, including the Venice Biennale Taiwan Pavilion (2011) and Documenta 14, among others. In Japan, her works have been shown at Parasophia: Kyoto International Festival of Contemporary Culture 2015 and TPAM 2019.





©Judith Buss

レクチャーパフォーマンス

Lecture Performance

ラビア・ムルエ [レバノン／ドイツ]

Rabih Mroué [Lebanon/Germany]

歓喜の歌
ODE TO JOY

日時

3月12日 [火] 19:00

3月13日 [水] 19:00

上演時間

約65分

会場

リーブラホール

〒105-0023 港区芝浦1-16-1 みなとパーク芝浦 1F

参加方法

要予約・コモンズバス提示

Dates

March 12th [Tue] / 19:00

March 13th [Wed] / 19:00

Performance times

approx. 65 min.

Venue

Libra Hall

1F Minato Park Shibaura, 1-16-1 Shibaura, Minato-ku, Tokyo 105-0023

How to Participate

Booking essential.

Show general admission pass on entry.

024

PROGRAM

メディアが作る歴史とイメージを攪拌せよ。
ポスト・トゥルースの時代を射抜く、レクチャーパフォーマンス。

Disrupt these images, disrupt the history created by the media.

Rabih Mroué's performative lecture penetrates the essence of the post-truth era.

1972年のミュンヘン・オリンピックは、イスラエル選手11名がパレスチナの過激派組織「黒い9月」の人質となったテロ事件によって、血塗られた大会となった。アラブ世界を代表するアーティスト、ラビア・ムルエは、パレスチナ人政治ジャーナリスト、マナル・カデルとともに、この事件をパレスチナ闘争の側から描く演劇作品を創作。2015年ミュンヘン・カンマーシュピールで初演し、世界中で大きな反響を呼んだ。今回のシアター・コモンズでは、オリンピックを控えた東京のために、特別にレクチャーパフォーマンスとして再構成して上演する。

ムルエとマナル・カデルは、1972年のオリンピックでのテロ事件という大きな物語とその詳細な事実に焦点を当てていく。そして、マスメディアにより操作・生成されるイメージや言説を辿りながら、むしろそこには現れない余白や歴史の空白にこそ、記述され再現される過去、挫折が繰り返される現在、あり得たかもしれない未来を見いだそうとする。複数の時間、複数のナラティブを巧みに交錯させ、固定化された歴史を攪拌することで、わたしたちはいかに「真実」に接近することができるだろうか。

上演言語

アラビア語・英語 (日本字幕つき)

クレジット

構成・テキスト・出演 | ラビア・ムルエ

製作 | ミュンヘン・カンマーシュピール

字幕翻訳 | 藤原敏史

字幕監修 | 戸田史子 (芸術公社)

会場協力 | 港区

助成 | オランダ王国大使館

Eleven Israeli athletes were taken hostages by Palestinian organization "The Black September" at the 1972 Munich Olympics, drenching the sporting event in blood. Rabih Mroué, one of the most prominent artists of the contemporary Middle East, has created a performance together with Palestinian political journalist Manal Khader that depicts this event from the point of view of the Israeli-Palestinian conflict – the play premiered at Munich Kammerspiele in 2015 and caused a huge sensation across the world. Tokyo is now on the verge of hosting its own Olympics. With this in mind, the piece will be specially restructured as a performative lecture for the 2019 rendition of Theater Commons Tokyo.

Mroué, along with his colleague Manal Khader, will focus on the grand narratives of the 1972 Olympic Games attack, what happened, why, and how. Outlining images that are manipulated and generated by the mass media – or rather, precisely the margins and historical gaps that they eschew. The past, described and reproduced; the present, where our failures are repeated; and a future we perhaps could have predicted...by disrupting fixed ideas of history, ingeniously intermingling multiple times and multiple narratives, how might we approach the "truth"?

Language

Arabic, English (with Japanese subtitles)

Credit

Concept, Written and Performed by Rabih Mroué

Produced by Münchner Kammerspiele

Subtitles translation by Toshifumi Fujiwara

Subtitles supervised by Fumiko Toda (Arts Commons Tokyo)

Venue support | Minato City

Supported by Embassy of the Kingdom of the Netherlands

プロフィール

ラビア・ムルエ | 1967年レバノン出身、ベルリン在住の俳優、演出家、脚本家。今日の中東アラブ世界の混沌と希望をもっともラディカルに表象するアーティストの一人。身体、映像など多様なメディアを用いて虚構と現実の境界を揺さぶりながら今日的な問いを浮かび上がらせる。2010年、スポルディング・グレイ賞受賞。2011年、プリンス・クラウドス賞受賞。2015年よりミュンヘン・カンマーシュピールのレジデント・アーティスト。日本では2004年および2007年東京国際芸術祭(TIF)、フェスティバル/トーキョー13等での招聘で公演を重ねている。

Profile

Rabih Mroué | Born in Lebanon in 1967 and currently residing in Berlin, Rabih Mroué is an actor, director, and playwright, as well as an artist offering some of the most radical depictions of the chaos and hopes of the contemporary Middle East. Blurring the line between truth and fiction, he brings a number of contemporary concerns to light in a diverse range of media, including video and the body. He was given the Spalding Grey Award in 2010 and the Prince Claus Award in 2011, and has been a resident artist at Munich Kammerspiele since 2015. With his invitations to Tokyo International Festival in 2004 and 2017, and to the 2013 rendition of Festival/Tokyo, Mroué has performed numerous times in Japan.



PROGRAM

025



© Takeshi YAMAGISHI

高山明/Port B Akira Takayama/Port B

新・東京修学旅行プロジェクト：福島編 Tokyo School Excursion Project: Fukushima Tour

〈関連企画〉ツアーパフォーマンス

<Satellite Event> Tour Performance

日時

3月9日 [土] – 3月11日 [月]

会場

東京都内・近郊数カ所

参加方法

コモンズパス不要

Port Bウェブサイトから予約 (www.portb.net)

Dates

March 9th [Sat] - March 11th [Mon]

Venue

Several locations in Tokyo and its suburbs

How to Participate

General admission pass not required

Please make reservations through Port B's website (www.portb.net)

026

PROGRAM

修学旅行生のふりをして旅するツアー演劇／学びの場。 福島から眼差された東京に、どんな未来が映り込むのか？

Join Port B in traveling as students on a school excursion for this tour-style play/learning opportunity. What kind of future will appear when Tokyo is seen from the perspective of Fukushima?

高山明率いるPort Bは、2002年の結成以来、一貫して東京という都市を思考し、演劇の可能性を理論・実践両面において拡張し続けてきた。その最新作「東京修学旅行プロジェクト」は、参加者自らが東京を他者の視点でリサーチ、旅のプランを作成し、修学旅行生のふりをして集団で旅する、というもの。東京で「外国人」「難民」「亡命者」として生きる人たちとともに巡るこのツアーは、参加者自身がつくりあげる学びの場であると同時に、都市を異化する演劇作品でもある。

今回あらたに企画される「新・東京修学旅行プロジェクト：福島編」は、この半年間で立て続けに開催されてきた「クルド編」、「中国残留孤児編」に続く「東京の歴史悲劇三部作」の最終章となる。あの震災から8年。福島から招かれた高校生たちと巡る2泊3日の「修学旅行」は、オリンピックを控えた今の東京に、複数の時間、複数の声を召喚する。福島から眼差された東京を旅する私たちは、過去の悲劇と現在が交わる先に、どんな未来を予見することになるのだろうか。

With a consistent focus on conceptualizing the city of Tokyo since the group's formation in 2002, Akira Takayama-led Port B has continued to expand the possibilities of theater in both theoretical and practical terms. In this new work, *Tokyo School Excursion Project*, participants will take on the perspectives of outsiders, conducting research on Tokyo and creating a travel plan. They will then embark on a group trip, pretending to be students on a school excursion. This tour, which will include those living in Tokyo as foreigners, refugees, and political exiles, will figure as a theatrical work of art that defamiliarizes the city, as well as a learning opportunity shaped by the participants themselves.

The newly organized *New Tokyo School Excursion Project: Fukushima Version* will be the final chapter in the *Tokyo Historical Tragedies Trilogy*, following the *Kurdish Version* and the *Japanese Orphans in China Version* held successively across the last half year. 8 years have passed since the earthquake. Invited from Fukushima, high school students will join this 3 day 2 night "school excursion" that will summon a number of times and voices to Tokyo as it awaits the Olympics. What kind of future will we perceive as we travel through this city—seen from the perspective of Fukushima—at the point where past tragedies meet the present day?

上演言語

日本語

Language

Japanese

クレジット

主催 | Port B

助成 | 川村文化芸術振興財団 ソーシャリー・エンゲイジド・アート支援助成

Credit

Organized by Port B

Supported by Kawamura Arts and Cultural Foundation Socially Engaged Art Support Grant

プロフィール

高山明 (たかやま・あきら) | 2002年に創作ユニットPort B (ポルト・ビー) を結成。国内外の諸都市において、ツアーパフォーマンス、映像インスタレーション、社会実験的プロジェクト、言論イベント、観光ツアーなど、多岐にわたる作品やプロジェクトを展開している。2013年にはPort都市リサーチセンターを設立し、演劇的発想を観光や都市プランニング、社会実践やメディア開発などにも応用する取り組みを行っている。

Profile

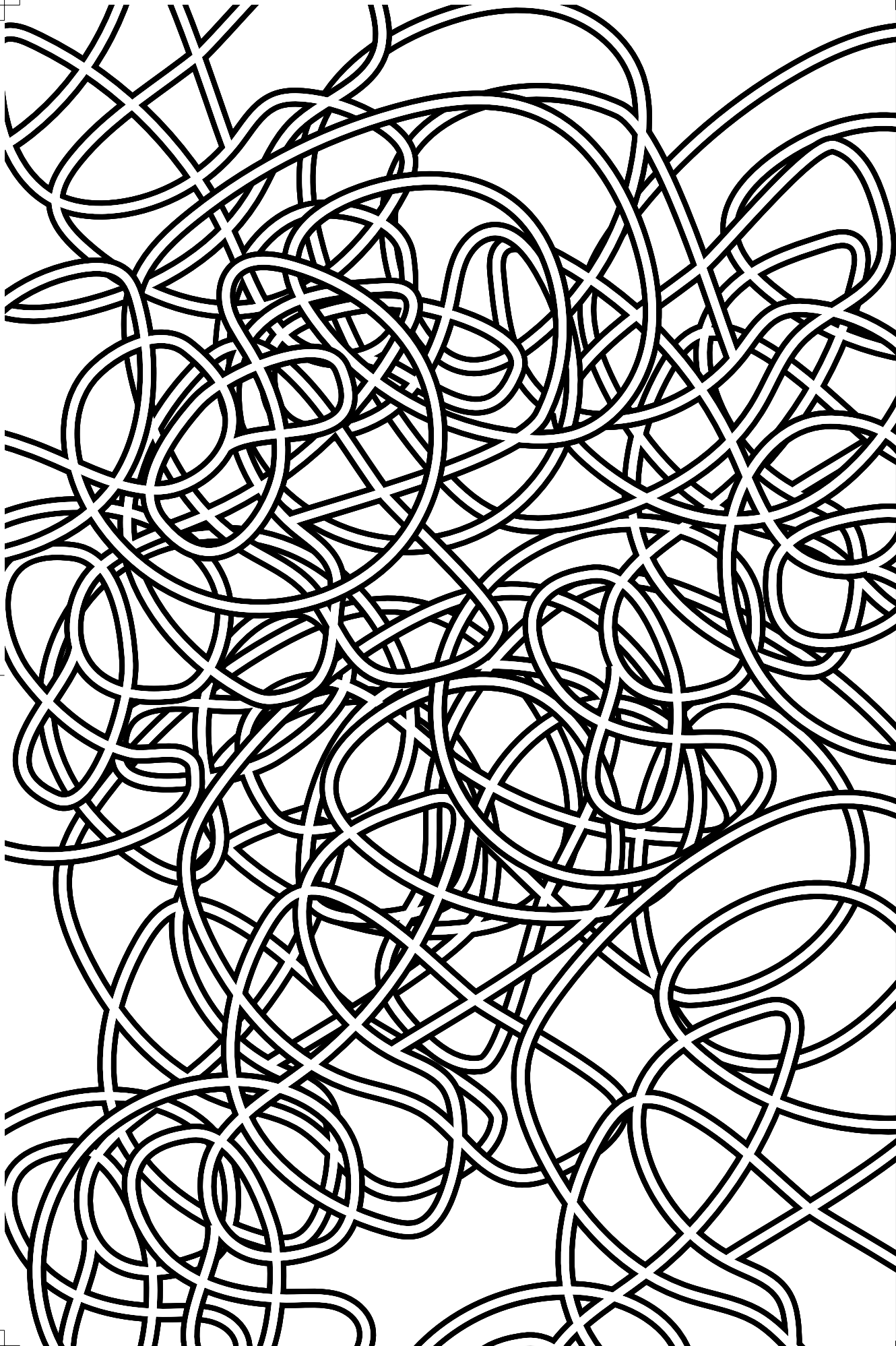
Akira Takayama | Akira Takayama formed the creative collective Port B in 2002. He produces a wide range of artworks and projects that include tour-style performances, video installations, social experiments, discussions, and sightseeing tours. In 2013, he founded Port Urban Research Center, which applies theatrical methods to tourism, urban planning, social practices, and media development, among other activities.



© Yasuyuki Emori

PROGRAM

027



リーディング・パフォーマンス

Reading Performance



2019年の東京で、声に出して戯曲を読む。
東京の日常に媚薬を垂らし、波紋を広げる。
リーディング・パフォーマンス始動。

声に出して戯曲を読む。演劇にとって最もシンプルな営みは、俳優だけではなく、あらゆる人に開かれている。だが、実際に一つの戯曲を最初から最後まで声に出して読んだ経験がある人は意外と少ないものだ。それでは今、オリンピックを控えた東京で、自分が声に出して読むとしたら、どこで、どんな言葉だろうか？

リーディング・パフォーマンスと題する本企画は、この問いを投げかけられた3人の演出家が提案する戯曲を、ある場所で、複数の参加者が初見で音読するというものだ。特別な準備や練習もない、ただ、戯曲に書かれた言葉を、たまたま居合わせた他の参加者とともに、声に出して読む。過去に書かれた言葉は、2019年の東京に生きるあなた自身の身体を経由し、「いま、ここ」にどのような変容をもたらすのか。3人の演出家が仕掛けるささやかな音読の時間と空間は、都市・東京の日常に、媚薬のように波紋を広げることになるだろう。

関連イベント

リーディング・パフォーマンス参加アーティスト3名によるポスト・トーク
日時| 3月10日 [日] 14:00の回終了後
会場| 慶應義塾大学三田キャンパス 旧ノグチ・ルーム
定員| 50名程度
参加方法| 予約不要・先着順 コモンズパス提示

Tokyo, 2019. An aphrodisiac splashes into our day-to-day routines, creating a ripple effect across the city – someone is reading aloud from a script. Introducing *Reading Performances*.

Reading a script aloud is theater's most basic activity, accessible to all – not only actors. There are, however, surprisingly few people who have actually read an entire play out loud from beginning to end. If one were to do so now, then – somewhere in Tokyo as it awaits the Olympics – where should one read and whose words should one choose?

We posed this question to three directors. In this series, which is titled *Reading Performances*, cold readings of the plays these directors have proposed will be held in specific locations by a variety of participants: no special preparations, no rehearsals, thrown together randomly, just reading aloud from the words in the script. Written in the past, how will these words be transformed in the here and now by passing through the bodies of those who live in Tokyo in 2019? The times and places selected for these modest readings will figure as aphrodisiacs, creating ripple effects in the city's day-to-day routines.

Related program

Post-performance talk by the three artists participating in Reading Performances
Date| March 10th, following the 14:00 performance
Venue| Keio University Mita Campus, Ex Noguchi Room
Number of places| approx. 50
Show general admission pass on entry (first come, first served)



慶應義塾大学 旧ノグチ・ルーム photo: 新良太

島崇／パブロ・ピカソ

Takashi Shima / Pablo Picasso

リーディング

Reading

しっぽをつかまれた欲望

Desire Caught by the Tail

日時

3月1日〔金〕19:00

3月7日〔木〕19:00

3月9日〔土〕13:00 *追加公演 / 17:00

上演時間

約120分

会場

慶應義塾大学三田キャンパス 旧ノグチ・ルーム
〒108-8345 港区三田2-15-45

参加方法

要予約・コモンズパス提示

注意事項

各回定員約20名（お申込いただいた皆様に音読の一部を担っていただきます）

Dates

March 1st [Fri] / 19:00

March 7th [Thu] / 19:00

March 9th [Sat] / 13:00 *Additional Performance / 17:00

Performance times

approx. 120 min.

Venue

Keio University Mita Campus, Ex Noguchi Room
2-15-45 Mita, Minato-ku, Tokyo 108-8345

How to Participate

Booking essential.
Show general admission pass on entry.

Note

Each performance is limited to 20 people (exceptions for special cases aside, everyone present will be given part of the play to read)

ピカソのタッチを真似て、絵を描くように声に出してみる。 「私たちの欲望」がシュールに暴走する、レジスタンスの演劇。

Trying to speak as though painting a picture, imitating Picasso's touch
– “our desires” take a surreal joyride in a play from the French Resistance.

ピカソが戯曲『しっぽをつかまれた欲望』を執筆したのは、《ゲルニカ》を描き終えた4年後の1941年、ナチス・ドイツ占領下のパリ。その言葉はまるで彼の絵画のように抽象的かつ詩的なイメージに溢れ、「タルト」や「大足」といったコミカルで隠喩的な登場人物たちが、荒唐無稽な会話と行為を繰り返す。初演は占領が続く1944年の春、ミシェル・レリスのアパルトマンの一室にて、リーディング形式で密やかに行われた。そこにはレジスタンスに身を投じる文化人たちが一堂に会し、役者としてサルトルやボーヴォワールらが登場、演出をカミュが務めたという。

マレビトの会を中心に活動する演出家・劇作家の島崇は今回、ピカソの言葉を80年後の東京に移植する。「ピカソが書いたのは政権を批判する者でも、悲惨に暮らす人々でもない。そこに暮らす人間の欲望である。私たちの欲望のしっぽは未だ何者かにつかまれたままである。そんな気がしてならない。もしくは自分自身で誰かに差し出しているのかもしれない。私たちにとってのレジスタンスとは何なのだろう。この息苦しさや不自由さの正体がわからないのだ。（演出ノートより）」ピカソのタッチを真似て、その爆発的なイメージをなぞるように声に出してみた時、「私たちの欲望」はどのように宙を舞い、どこに着地するのだろうか。

上演言語

日本語

クレジット

構成・演出 | 島崇
作 | パブロ・ピカソ
会場協力 | 慶應義塾大学アート・センター

Language

Japanese

Credit

Concept and Direction | Takashi Shima
Written by Pablo Picasso
Venue support | Keio University Art Center

プロフィール

島崇（しま・たかし） | 秋田県出身。京都造形芸術大学映像・舞台芸術学科卒業後、演出家・劇作家・俳優として活動。2009年よりマレビトの会に俳優として参加。以後継続して参加が続いている。2017、2018年にフェスティバル/トーキョーで上演されたマレビトの会「福島を上演する」では劇作も務める。2014年より出身地である秋田県内において「私の病める舞姫プロジェクト」を展開中。

パブロ・ピカソ | 1881年スペイン、マラガ生まれ、1974年逝去。フランスでの制作活動を通じ、20世紀に最も影響を与えたアーティストの一人。キュビズム・ムーブメントの創立者であり、油絵、素描、版画、挿絵、彫刻、陶器などの多岐に渡る美術作品の他にも、舞台デザイナー、詩人、そして劇作家としても活動をしていた。スペイン市民戦争の光景を描いた代表作《ゲルニカ》（1937年）は、世界で最も有名な反戦芸術の一つである。

Profile

Takashi Shima | Takashi Shima was born in Akita prefecture. Following his graduation from Kyoto University of Art and Design as a major in Film Production and Performing Arts, he has worked as a director, playwright, and actor. Since 2009, he has regularly participated as an actor in Marebito Theater Company. He also served as the playwright for Marebito Theater Company's *Performing Fukushima*, performed at Festival/Tokyo in 2017 and 2018. Since 2014, Shima has been developing the *My Sick Dancing Girl Project* in his home prefecture, Akita.

Pablo Picasso | Pablo Picasso was born in Málaga, Spain in 1881 and passed away in 1974. His creative activities in France cemented him as one of the most influential artists of the 20th century. Picasso was the founder of Cubism, and, in addition to his artwork, which spanned oil painting, drawing, printmaking, illustration, sculpture, ceramics, and more, also created stage designs, poems, and plays. His masterpiece *Guernica* (1937), which depicted the circumstances of the Spanish civil war, is one of the most famous antiwar artworks in the world.





© Lynn Gilbert

中村佑子／スーザン・ソンタグ

Yuko Nakamura / Susan Sontag

アリス・イン・ベッド

Alice in Bed

日時

3月2日 [土] 14:00

3月7日 [木] 14:00 *追加公演

3月8日 [金] 19:00

3月10日 [日] 14:00 *終演後、ポストトーク有

上演時間

約120分

会場

慶應義塾大学三田キャンパス 旧ノグチ・ルーム
〒108-8345 港区三田2-15-45

参加方法

要予約・コモンズパス提示

注意事項

各回定員約20名（お申し込んだいた皆様に音読の一部を担っていただきます）

Dates

March 2nd [Sat] / 14:00

Marth 7th [Thu] / 14:00 *Additional Performance

March 8th [Fri] / 19:00

March 10th [Sun] / 14:00 *Talk (after the performance)

Performance times

approx. 120 min.

Venue

Keio University Mita Campus, Ex Noguchi Room
2-15-45 Mita, Minato-ku, Tokyo 108-8345

How to Participate

Booking essential.

Show general admission pass on entry.

Note

Each performance is limited to 20 people (exceptions for special cases aside, everyone present will be given part of the play to read)

リーディング
Reading

他者の痛みとともに在ることは可能か？

スーザン・ソンタグによる「ベッドの国のアリス」、日本語での初リーディング。

Is it possible to approach the pain of others? Yuko Nakamura presents the first Japanese reading of Susan Sontag's *Alice in Bed*.

今日ますます世界中で読み継がれる批評家スーザン・ソンタグの言葉。今回はじめて邦訳され、朗読される『アリス・イン・ベッド』は、一人の実在の女性、アリス・ジェイムズ(1848-1892)の物語である。哲学者ウィリアム・ジェイムズ、小説家ヘンリー・ジェイムズという著名な兄弟をもつ彼女は、兄たちに負けず劣らず才気に溢れていたが、若くして精神を病み、長年病床にいたという。ソンタグはアリスの死後40年を経て出版された日記をもとに、彼女の魂の彷徨や、父兄との葛藤を戯曲化した。

「女性性」をテーマに思索と創作を続ける映画監督・エッセイストの中村佑子が今回、自らこの戯曲の翻訳も手がけながら、アリスとその枕元に召喚された実在・架空の女性たち——詩人エミリー・ディキンソン、女性活動家マーガレット・フルー、魔女、妖精、亡き母——らの声を、この東京という都市に響かせる。女性として生きることの不条理や痛み。時代を超えて抑圧に抗いながら生きてきた女性たちが一同に会し、その感情を連鎖させていくことで、アリスの傷んだ魂を解放する……。彼女たちの身体から振り絞られるような言葉を声に出して読むことで、私たちは今、この社会で声をあげられない者たちの痛みとどのように共に在ることができるだろうか。

上演言語

日本語

クレジット

構成・演出 | 中村佑子 作 | スーザン・ソンタグ
翻訳協力 | 西山敦子 協力 | The Wylie Agency (UK) Ltd.
会場協力 | 慶應義塾大学アート・センター

プロフィール

中村佑子（なかむら・ゆうこ） | 1977年、東京生まれ。慶應義塾大学文学部哲学科卒。哲学書房にて編集者を経て、テレビマンユニオン参加。美術や建築、哲学を題材としながら、現実世界のもう一枚深い皮層に潜るようなナラティブのドキュメンタリーを多く手がける。映画作品に『はじまりの記憶 杉本博司』、『あえかなる部屋 内藤礼と、光たち』（2017年カナダ国際ドキュメンタリー祭HOTDOCS正式招待作品）、テレビ演出作にWOWOW『はじまりの記憶 現代美術作家 杉本博司』（2012年国際エミー賞・アート部門ファイナルノミニ）、NHK「幻の東京計画 首都にあり得た3つの夢」（2015年ギャラクシー奨励賞受賞）、NHK「建築は知っている ランドマークから見た戦後70年」等がある。現在、文芸誌『すばる』にてエッセイ「私たちはここにいる 現代の母なる場所」を連載中。近年は「女性性」をテーマとしている。

スーザン・ソンタグ | 1933年アメリカ、ニューヨーク生まれ、2004年逝去。アメリカを代表する作家、批評家。長篇小説には『夢の賜物』（河出書房新社）、『死の装具』（早川書房）、『火山に恋して』（みすず書房）、『イン・アメリカ』（河出書房新社）がある。また、短篇集や戯曲、『写真論』（晶文社）、『隠喩としての病い／エイズとその隠喩』、『土星の微しの下に』、『他者の苦痛へのまなざし』、『書くこと、ロラン・バルトについて』、『サラエゴで、ゴドーを待ちながら』（以上みすず書房）などのエッセイがある。さらに4つの長篇映画の脚本執筆と監督をし、アメリカとヨーロッパにおいて劇の演出も手がけた。その中には、包囲されたサラエゴで上演されたベケットの『ゴドーを待ちながら』の演出も含まれる。2001年に「イェルサレム賞」を受賞。（みすず書房HPより）

The words of critic Susan Sontag are increasingly read across the world. Read aloud in its first Japanese translation, Theater Commons Tokyo presents Sontag's *Alice in Bed*, based on the true story of Alice James (1848-1892). Though equally as brilliant as her celebrated brothers, philosopher William James and novelist Henry James, Alice suffered a mental breakdown at a young age and was bedridden for most of her life. Adapted from her diary, which was published 40 years after her death, *Alice in Bed* depicts the wanderings of Alice's soul, her conflicts with her father and brothers, and more.

Filmmaker and essayist Yuko Nakamura focuses her meditations and creative work on the topic of femininity. She was involved in the play's translation, bringing to Tokyo the voices of Alice and the real and fictional women summoned to her bedside: poet Emily Dickinson, feminist activist Margret Fuller, witches, fairies, dead mothers. There is absurdity and pain in living as a female. By linking these emotions in the meeting of women who fought oppression across the eras, the play effects a liberation of Alice's wounded soul; by reading these words, which appear as though summoned from the women's bodies, how might we attend to the pain of those without voices in society today?

Language

Japanese

Credit

Concept and Direction | Yuko Nakamura Written by Susan Sontag
Translation support | Atsuko Nishiyama Thanks to The Wylie Agency (UK) Ltd.
Venue support | Keio University Art Center

Profile

Yuko Nakamura | Yuko Nakamura was born in Tokyo in 1977 and graduated from Keio University's Faculty of Letters as a Philosophy major. Following her work as an editor at a philosophy publisher, she joined TV MAN UNION. She is involved in the creation of many narrative documentaries that dive past the surface of the modern world, treating topics such as art and architecture, philosophy and more. Her films include *Memories of Origin: Hiroshi Sugimoto*; *A Room of Her Own: Rei Naito and Light* (official selection at 2017 Canadian International Documentary Festival Hot Docs 2017); TV documentary WOWOW *Memories of Origin: Contemporary Artist Hiroshi Sugimoto* (finalist for International Emmy Award for Arts Programming 2012); NHK *Illusory Tokyo Project: Three Potential Dreams of the Capital* (winner of Galaxy Honors for programs recommended 2015); NHK *Architecture Knows: Postwar 1970 as Seen From Landmarks*, and more. Her essay "We are Here: Contemporary Spaces for Mothers" is currently being serialized in literary magazine Subaru. In recent years, her work has focused on the topic of femininity.

Susan Sontag | Susan Sontag was born in New York in 1933 and passed away in 2004. She was a prominent American novelist and critic. Her novels include *The Benefactor*, *Death Kit*, *The Volcano Lover*, and *In America*. She also wrote short stories, plays, and essays, including "On Photography," "Illness as a Metaphor," "Under the Sign of Saturn," "Regarding the Pain of Others," "Writing Itself: On Roland Barthes," and "Waiting for Godot in Sarajevo." She additionally wrote and directed four feature films, and directed plays in both America and Europe – among them, Samuel Beckett's *Waiting for Godot*, staged in a besieged Sarajevo. She was awarded the Jerusalem Award in 2001.





© Shigemi Togashi

萩原雄太／太田省吾 Yuta Hagiwara / Shogo Ota

リーディング
Reading

更地 Sarachi (Vacant Lot)

日時

3月6日 [水] 19:00

3月10日 [日] 19:00

3月11日 [月] 14:00 *追加公演 / 19:00

上演時間

約120分

会場慶應義塾大学三田キャンパス 旧ノグチ・ルーム
〒108-8345 港区三田2-15-45**参加方法**

要予約・コモンズパス提示

注意事項

各回定員約20名（お申し込んだいた皆様に音読の一部を担っていただきます）

Dates

March 6th [Wed] / 19:00

March 10th [Sun] / 19:00

March 11th [Mon] / 14:00 *Additional Performance / 19:00

Performance times

approx. 120 min.

VenueKeio University Mita Campus, Ex Noguchi Room
2-15-45 Mita, Minato-ku, Tokyo 108-8345**How to Participate**Booking essential.
Show general admission pass on entry.**Note**

Each performance is limited to 20 people (exceptions for special cases aside, everyone present will be given part of the play to read)

変容する都市・東京を眼の前に 太田省吾の言葉を発し「更地」を見つめる密かな時間。

Join Yuta Hagiwara in these furtive hours to recite the words of Shogo Ota and examine “vacant lots,” bringing the changing city of Tokyo before our eyes.

終戦とともに、日本は更地になった。また度重なる震災により、1995年には関西に、2011年には東北・東日本に広大な更地が出現した。1992年、バブル景気の狂乱の崩壊期に執筆された太田省吾の戯曲『更地』もまた、家の解体を終えた更地を訪れた、ある男女を描いている。しかし、二人が過去を回想する更地は、どこか、私たちに希望を感じさせてくれる。

かもめマシーンを主宰し、古今東西の戯曲を果敢に現代に読み解く演出家の萩原雄太は今回、この戯曲を参加者とともに発話することで、幾度にもわたってこの国に出現した「更地」を見つめる視線の必要性を問いかける。今、オリンピックを目前に控え、不安定な地盤の上に数多くの建築を生み出し、都市はその姿を変えようとしている。私たちは、建築物や開発ではなく、更地を共有しているのではなかったか。2019年3月、ここ東京で太田の言葉に身体を委ね、これまでとこれからのボイドを見つめよう。

上演言語

日本語

クレジット構成・演出 | 萩原雄太
作 | 太田省吾
振付協力 | 尾花藍子
会場協力 | 慶應義塾大学アート・センター**プロフィール**

萩原雄太（はぎわら・ゆうた）| 1983年生まれ。演出家、かもめマシーン主宰。早稲田大学在学中より演劇活動を開始。愛知県文化振興事業団「第13回AAF戯曲賞」、「利賀演劇人コンクール2016」、浅草キッド『本業』読書感想文コンクール受賞。手塚夏子『私的解剖実験虚像からの旅立ち』にはパフォーマーとして出演。2018年、ベルリンで開催された「Theatertreffen International Forum」に参加する。

太田省吾（おおた・しょうご）| 1939年中国、済南市生まれ、2007年逝去。劇作家、演出家。68年、劇団「転形劇場」の創立に参加、70年より主宰。77年初演『小町風伝』で、第22回岸田國士戯曲賞受賞。81年初演の『水の駅』は台詞を排除した前衛的な『沈黙劇』として知られ、『地の駅』、『風の駅』とともに沈黙劇3部作として世界20都市以上で上演を成した。88年劇団解散後、藤沢市湘南台市民シアター芸術監督、近畿大学教授、京都造形芸術大学教授・映像舞台芸術学課長などを歴任。『更地』は劇団解散後の92年に書かれた。

With the end of the war, Japan had become a vacant lot. Vast vacant lots appeared once again in Kansai in 1995 and in Tohoku/East Japan in 2011, following a series of earthquakes. Written during the frenzied collapse of the bubble economy, Shogo Ota's 1992 play, *Vacant Lot*, too, portrays a man and woman visiting a vacant lot after the demolition of their home. This vacant lot, however – which for the couple recalls the past – somehow gives us a sense of hope.

Director Yuta Hagiwara is the leader of Kamome Machine, boldly interpreting plays both ancient and modern, Eastern and Western into contemporary times. In this Theater Commons Tokyo performance, he will read aloud together with participants, exploring the necessity of examining the “vacant lots” that have appeared time and again in this country. Now, with the Olympics just on the horizon, the city is attempting undergo changes, constructing a large number of buildings on this unstable land – and yet, our common ground appears to lie not in architecture and developments, but rather in vacant lots. Here in Tokyo, in March 2019, you are invited to give yourself over to Ota's words, and gaze into the voids to come.

Language

Japanese

CreditConcept and Direction Yuta Hagiwara
Written by Shogo Ota
Choreography support | Aiko Obana
Venue support | Keio University Art Center**Profile**

Yuta Hagiwara | Born in 1983, Yuta Hagiwara is a director, as well as the leader of theater company Kamome Machine. He began working with theater during his time at Waseda University, and has since been awarded the Aichi Arts Revitalization Initiative's 13th AAF Drama Award; the Toga Theatre Competition's Excellence Award 2016; and the top award at the Asakusa Kid Hongyo Reading Impressions Contest. Hagiwara has appeared as a performer in Natsuko Tezuka's *Personal Anatomy Experiment 6 Journey from a Virtual Image*. He participated in Theatertreffen: International Forum, held in Berlin 2018.

Shogo Ota | Shogo Ota was a director and playwright born in 1939 in Shandong, China. He passed away in 2007. In 1963, he participated in the establishment of Tenkei Theater Company, becoming its leader in 1970. He was awarded the Kishida drama prize for *The Tale of Komachi Told by the Wind*, which premiered in 1977. Ota's play *Water Station*, premiering in 1981, is known as an avant-garde “silent play” which has no lines. It has been performed in over 20 cities across the world, in concert with his other two silent plays, *Earth Station* and *Fire Station*. Following Tenkei's dissolution in 1988, Ota held successive positions as a professor at Kinki University, a professor at the Kyoto University of Art and Design and head of its Department of Film Production and Performing Arts, among others. *Vacant Lot* was written after his company's dissolution, in 1992.



会場

ゲーテ・インスティトゥート 東京ドイツ文化センター

〒107-0052 港区赤坂7-5-56
Tel: 03-3584-3201
東京メトロ銀座線・半蔵門線／
都営大江戸線「青山一丁目駅」4（北）出口より徒歩7分

台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター

〒105-0001 港区虎ノ門1-1-12 虎ノ門ビル2F
Tel: 03-6206-6180
東京メトロ銀座線「虎ノ門駅」9番出口より徒歩1分
東京メトロ丸ノ内線・日比谷線・千代田線「霞ヶ関駅」C2
出口より徒歩3分
都営三田線「内幸町駅」A4出口より徒歩7分
JR「新橋駅」日比谷口より徒歩12分

リーブラホール

〒105-0023 港区芝浦1-16-1 みなとパーク芝浦1F
JR「田町駅」東口（芝浦口）より徒歩5分
都営三田線・浅草線「三田駅」A6出口より徒歩6分

慶應義塾大学三田キャンパス 旧ノグチ・ルーム

〒108-8345 港区三田2-15-45 慶應義塾大学 南館3F
Tel: 03-5427-1621
都営三田線・浅草線「三田駅」A3出口より徒歩12分
JR「田町駅」西口（三田口）より徒歩13分
都営大江戸線「赤羽橋駅」赤羽橋口より徒歩13分
※慶應義塾大学南門（正門）より徒歩5分含む

SHIBAURA HOUSE

〒108-0023 港区芝浦3-15-4
Tel: 03-5419-6446
JR「田町駅」東口（芝浦口）より徒歩7分
都営三田線・浅草線「三田駅」A4出口より徒歩10分

北千住BUoY 2F ギャラリー

〒120-0036 足立区千住仲町49-11
東京メトロ千代田線・日比谷線「北千住駅」出口1より
徒歩6分
JR・東武スカイツリーライン「北千住駅」西口より
徒歩8分

VENUES

Goethe-Institut Tokyo

7-5-56 Akasaka, Minato-ku, Tokyo 107-0052
Tel: 03-3584-3201
Aoyama-itchome Station (Tokyo Metro Ginza or
Hanzomon Lines / Toei Oedo Line): 7 minutes walk
from 4 (North) Exit

Taiwan Cultural Center, Taipei Economic and Cultural Representative Office in Japan

2F Toranomon Building 1-1-12 Toranomon,
Minato-ku, Tokyo 105-0001 Tel: 03-6206-6180
Toranomon Station (Tokyo Metro Ginza Line):
1 minute walk from 9 Exit
Kasumigaseki Station (Tokyo Metro Marunouchi,
Hibiya or Chiyoda Lines): 3 minutes walk from C2 Exit
Uchisaiwaicho Station (Toei Mita Line): 7 minutes
walk from A4 Exit
Shinbashi Station (JR): 12 minutes walk from Hibiya
Exit

Libra Hall

1F Minato Park Shibaura, 1-16-1 Shibaura, Minato-
ku, Tokyo 105-0023
Tamachi Station (JR): 5 minutes walk from East
(Shibaura) Exit
Mita Station (Toei Mita or Asakusa Lines): 6
minutes walk from A6 Exit

Keio University Mita Campus, Ex Noguchi Room

3F South Building, Keio University, 2-15-45 Mita,
Minato-ku, Tokyo 108-8345
Tel: 03-5427-1621
Mita Station (Toei Mita or Asakusa Lines): 12
minutes walk from A3 Exit
Tamachi Station (JR): 13 minutes walk from West
(Mita) Exit
Akabanebashi Station (Toei Oedo Line): 13 minutes
walk from Akabanebashi Exit
*including 5 minutes walk from South Gate (Main
Gate) of Keio University

SHIBAURA HOUSE

3-15-4 Shibaura, Minato-ku, Tokyo 108-0023
Tel: 03-5419-6446
Tamachi Station (JR): 7 minutes walk from East
(Shibaura) Exit
Mita Station (Toei Mita or Asakusa Lines):
10 minutes walk from A4 Exit

Kitasenju BUoY 2F Gallery

49-11 Senju-Nakacho, Adachi-ku, Tokyo 120-0036
Kita-Senju Station (Tokyo Metro Chiyoda or Hibiya
Lines): 6 minutes walk from 1 Exit
Kita-Senju Station (JR or Tobu Skytree Line):
8 minutes walk from West Exit

スケジュール／SCHEDULE

リーディング・パフォーマンス
Reading Performance

	1 JAN		2 FEB							3 MAR													
アーティスト／演目	19 SAT	20 SUN	・・・	22 FRI	23 SAT	24 SUN	25 MON	26 TUE	27 WED	28 THU	1 FRI	2 SAT	3 SUN	4 MON	5 TUE	6 WED	7 THU	8 FRI	9 SAT	10 SUN	11 MON	12 TUE	13 WED
シャンカル・ヴェンカテేశワラン 「犯罪部族法」 Sankar Venkateswaran “Criminal Tribes Act”	15:00-	13:00-																					
シアターコモンズ'19 オープニング・シンポジウム 「未来の祝祭、未来の劇場」 Theater Commons Tokyo '19 Opening Symposium “Festivals and Theaters to Come”		14:00-																					
田中功起 「可傷的な歴史（ロードムービー）」 Koki Tanaka “Vulnerable Histories (A Road Movie)”				19:00-	19:00-	13:00-																	
小泉明郎 「私たちは未来の死者を弔う」 Meiro Koizumi “We Mourn the Dead of the Future”				13:00-20:00	12:00-20:00	12:00-20:00			13:00-19:00 19:00-21:00 関連イベント Related program	13:00-20:00	13:00-20:00	12:00-20:00	12:00-20:00			13:00-20:00	13:00-20:00	13:00-20:00	12:00-20:00	12:00-19:00			
マキシム・キュルヴェルス 「悲劇の誕生」 Maxime Kurvers “The Birth of Tragedy”				16:30-	16:30- アフタートーク有 Talk (after the performance)																		
オグトゥ・ムラヤ 「Because I Always Feel Like Running」 Ogutu Muraya “Because I Always Feel Like Running”					14:00- 19:00-	19:00- アフタートーク有 Talk (after the performance)																	
島崇／パブロ・ピカソ 『しっぽをつかまれた欲望』 Takashi Shima / Pablo Picasso “Desire Caught by the Tail”											19:00-						19:00-		13:00- *追加公演 17:00-				
中村佑子／スーザン・ソントグ 『アリス・イン・ベッド』 Yuko Nakamura / Susan Sontag “Alice in Bed”												14:00- *追加公演					14:00- *追加公演	19:00-		14:00- ポスト・トーク Talk (after the performance)			
萩原雄太／太田省吾 『更地』 Yuta Hagiwara / Shogo Ota “Sarachi (Vacant Lot)”																19:00-			19:00-	14:00- *追加公演 19:00-			
ワン・ホンカイ 「This is no country music」 Hong-Kai Wang “This is no country music”												17:00-	17:00-										
ラビア・ムルエ 「歓喜の歌」 Rabih Mroué “ODE TO JOY”																					19:00-	19:00-	
高山明/Port B 「新・東京修学旅行プロジェクト:福島編」 Akira Takayama/Port B “Tokyo School Excursion Project: Fukushima Tour”																							

クレジット

シアターコモンズ ’19

シアターコモンズ実行委員会

委員長 | 相馬千秋 (特定非営利活動法人芸術公社 代表理事)
副委員長 | 王淑芳 (台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター長)
委員 | ベーター・アンダース (東京ドイツ文化センター所長)
委員 | サンソン・シルヴァン (在日フランス大使館 / アンスティチュ・フランセ日本)
委員 | バス・ヴァルクス (オランダ王国大使館)
委員 | 大館奈津子 (特定非営利活動法人芸術公社 理事)
監事 | 須田洋平 (弁護士)

シアターコモンズ実行委員会事務局

ディレクター | 相馬千秋 (芸術公社)
制作統括 | 戸田史子 (芸術公社)、清水聡美 (芸術公社)
制作 | 大館奈津子 (芸術公社)、富樫多紀、田辺裕子
制作アシスタント | 山里真紀子
企画アドヴァイザー | 岩城京子 (芸術公社)
広報・編集 | 柴原聡子、橋場麻衣
翻訳 | リリアン・キャンライト (Art Translators Collective)
アート・ディレクション&デザイン | 加藤賢策 (LABORATORIES)
ウェブデザイン | 加藤賢策、伊藤博紀 (LABORATORIES)
インターン | 江尻悠介、黒川知樹、小橋清花、鈴木健斗、関あゆみ、
中畔由貴、中尾幸志郎、幸村和也、ルー・エイミ・ティファニー
経理 | 松下琴美
法務アドヴァイザー | 須田洋平 (弁護士 / 芸術公社)

シアターコモンズ ’19 技術スタッフ

舞台監督 | ラング・クレイグヒル
照明 | 山下恵美 (RYU.Inc)、帆足ありあ (RYU.Inc)、大庭圭二 (RYU.Inc)
音響 | 稲荷森健、市村隼人
映像 | 石塚俊
記録映像・写真 | 佐藤駿

シアターコモンズ ’19

発行日 | 2019年2月12日
執筆 | シアターコモンズ実行委員会
編集 | 柴原聡子、橋場麻衣
翻訳 | リリアン・キャンライト (Art Translators Collective)
アート・ディレクション&デザイン | 加藤賢策 (LABORATORIES)
デザイン協力 | 和田真季 (LABORATORIES)
発行 | シアターコモンズ実行委員会
Tel: 080-3936-6676
Web: <http://theatercommons.tokyo>
E-mail: artscommons.tokyo.inquiry@gmail.com

禁無断複製・転用 © シアターコモンズ実行委員会 2019

CREDITS

Theater Commons Tokyo ’19

Theater Commons Tokyo Executive Committee

Chairperson | Chiaki Soma (Representative Director, Arts Commons Tokyo)
Vice-chairman | WANG Shu-Fang (Taiwan Cultural Center, Taipei Economic and Cultural Representative Office in Japan)
Member | Peter Anders (Institutsleiter, Goethe-Institut Tokyo)
Samson Sylvain (Embassy of France in Japan / Attaché culturel, Institut français du Japon)
Bas Valckx (Embassy of the Kingdom of the Netherlands)
Natsuko Odate (Board Director, Arts Commons Tokyo)
Auditor | Yohei Suda (Lawyer)

Theater Commons Tokyo Staff

Executive Director | Chiaki Soma (Arts Commons Tokyo)
Production Manager and Coordinator | Fumiko Toda (Arts Commons Tokyo),
Satomi Shimizu (Arts Commons Tokyo)
Project Coordinator | Natsuko Odate (Arts Commons Tokyo), Taki Togashi,
Yuko Tanabe
Assistant Project Coordinator | Makiko Yamazato
Project Adviser | Kyoko Iwaki (Arts Commons Tokyo)
Editor / PR | Satoko Shibahara, Mai Hashiba
Translation | Lillian Canright (Art Translators Collective)
Art Direction / Design | Kensaku Kato (LABORATORIES)
Web Design | Kensaku Kato, Hiroki Ito (LABORATORIES)
Intern | Yusuke Ejiri, Tomoki Kurokawa, Kiyoka Kohashi,
Kento Suzuki, Ayumi Seki, Yuki Nakaaaze, Koshiro Nakao, Kazuya Yukimura,
Amy Tiffany Loo
Accountant | Kotomi Matsushita
Legal Adviser | Yohei Suda (Lawyer / Arts Commons Tokyo)

Theater Commons Tokyo ’19 Technical Staff

Stage Manager | Lang Craighill
Lighting | Megumi Yamashita (RYU.Inc), Aria Hoashi (RYU.Inc), Keiji Oba (RYU.Inc)
Sound | Takeshi Inarimori, Hayato Ichimura
Movie | Shun Ishizuka
Documentation Video and Photography | Shun Sato

Theater Commons Tokyo ’19

Date of Issue | February 12th, 2019
Editor | Satoko Shibahara, Mai Hashiba
Translation | Lillian Canright (Art Translators Collective)
Art Direction / Design | Kensaku Kato (LABORATORIES)
Design Assistant | Maki Wada (LABORATORIES)
Text and Published by Theater Commons Tokyo Executive Committee
Tel: 080-3936-6676
Web: <http://theatercommons.tokyo>
E-mail: artscommons.tokyo.inquiry@gmail.com

© Theater Commons Tokyo Executive Committee 2019. All rights reserved.

